

特集：平成 25 年度第 1 回 F D 研究会報告  
大学初年次の共通教育と学修支援

# ディア ログス

ギリシャ語の ΔΙΑΛΟΓΟΣは「対話」という意味です。英語・フランス語・ドイツ語・イタリア語など、西洋近代諸語も、それを音写して取り入れています。「対話」は「真理への道」として、古代ギリシャの哲学者ソクラテスの哲学の方法とされ、その弟子プラトンの著作の形式「対話編」となって有名となった言葉です。現代はその「真理への道」としての対話ばかりか、一般用法としての「相互理解の道」としての対話まで弱くなり、もっとも強く復活が望まれるものと言えます。

第21号

教育推進・学生支援機構 教養教育推進部門  
FD研究会 報告書「ディアロゴス」 第21号

目 次

- 実施要項・・・1
- 学長挨拶・・4  
学長 森 秀樹
- 講演1 三重大大学の初年次教育とピアサポーター養成の取組み・・・・・・・・5  
中川 正 (三重大学 学長補佐)  
資料
- 講演2-1 手探りの初年次セミナー：工学部での取組み・・・・・・・・・・19  
青木 正人 (工学部 教授)  
資料
- 講演2-2 手探りの初年次セミナー：工学部での取組み・・・・・・・・・・27  
三宅 恵子 (岐阜大学 非常勤講師)  
資料
- 講演3 応用生物科学部における初年次教育の進展・・・・・・・・・・・・34  
早川 享志 (応用生物科学部 教授)  
資料
- 総合討論・・42  
司会：安田 淳一郎 (教養教育推進センター 准教授)
- 参加者データ・・50
- 参加者アンケート・・51

## 平成25年度 岐阜大学教養教育推進センター FD研究会 実施要項

【テーマ】 大学初年次の共通教育と学修支援

### 【趣旨】

大学の教育目標に応じた汎用的技能の育成を目的とした少人数セミナーが、多くの大学で全学共通教育科目として開講されています。一方、その授業内容や運用方法は大学によって多様であり、試行錯誤を続けている大学も多いのが現状です。そこで今回のFD研究会では、三重大から講師をお招きし、同大でのスタートアップセミナーおよびピアサポーター制度についてご講演いただきます。また本学の工学部、応用生物科学部より各学部での初年次セミナーの実践について報告いたします。少人数セミナーについて知見を共有しつつ、総合討論を行うことによって、大学の共通教育と初年次の学修支援の在り方について全学的な議論を深めることが本FDのねらいです。

【日時】 平成25年7月31日（水）13：00～15：00

【場所】 岐阜大学 全学共通教育講義棟 105 教室

【対象】 岐阜大学 教職員・学生

【参加人数】 64 名

【主催】 岐阜大学教養教育推進センター

### 【プログラム】

|             |   |
|-------------|---|
| 13:00～13:05 | 「学長挨拶」 森 秀樹 学長  |
| 13:05～13:45 | 「三重大大学の初年次教育とピアサポーター養成の取組み」<br>中川 正 氏（三重大学 学長補佐）              |
| 13:45～14:05 | 「手探りの初年次セミナー：工学部での取組み」<br>青木 正人 氏（工学部 教授）、三宅 恵子 氏（岐阜大学 非常勤講師） |
| 14:05～14:20 | 「応用生物科学部における初年次教育の進展」<br>早川 享志 氏（応用生物科学部 教授）                  |
| 14:20～15:00 | 「総合討論」<br>司会：安田 淳一郎（岐阜大学教養教育推進センター准教授）                        |

## 【講演者略歴】

### 中川 正 氏 （三重大学 学長補佐）

1987年筑波大学・地球科学系 講師。1996年三重大学・人文学部 助教授。2003年三重大学・人文学部 教授。2009年三重大学副学長（教育担当）、共通教育センター長、学生総合支援センター長。2011年三重大学副学長（学生総合支援担当）、学生総合支援センター長。2012年三重大学学長補佐、キャリアセンター長。

2013年度 第1回 FD研究会

# 大学初年次の共通教育と学修支援

**日時** 7月31日（水） 13:00～15:00

**場所** 全学共通教育講義棟 105教室

**対象** 岐阜大学 教職員・学生, その他どなたでも

## 趣旨

大学の教育目標に応じた汎用的技能の育成を目的とした少人数セミナーが、多くの大学で全学共通教育科目として開講されています。一方、その授業内容や運用方法は大学によって多様であり、試行錯誤を続けている大学も多いのが現状です。そこで今回のFD研究会では、三重大から講師をお招きし、同大でのスタートアップセミナーおよびピアサポーター制度についてご講演いただきます。また本学の工学部、応用生物科学部より各学部での初年次セミナーの実践について報告いたします。少人数セミナーについて知見を共有しつつ、総合討論を行うことによって、大学の共通教育と初年次の学修支援の在り方について全学的な議論を深めることが本FDのねらいです。

## プログラム

- 13:00 学長挨拶 森 秀樹 学長
- 13:05 三重大大学の初年次教育とピアサポーター養成の取組み  
中川 正 氏 (三重大学 学長補佐)
- 13:45 手探りの初年次セミナー：工学部での取組み  
青木 正人 氏 (工学部 教授), 三宅 恵子 氏 (岐阜大学 非常勤講師)
- 14:05 応用生物科学部における初年次教育の進展  
早川 享志 氏 (応用生物科学部 教授)
- 14:20 総合討論  
司会：安田 淳一郎 (教養教育推進センター 准教授)

## 主催

教養教育推進センター

E-mail : ysdjun16@gifu-u.ac.jp Tel : 058 - 293 - 3097 (安田)

## 学長挨拶

森 秀樹 学長



皆さん、こんにちは。岐阜大学 2013 年度第 1 回 FD 研究会にご参加いただき、ありがとうございます。本日の FD 研究会のタイトルは「大学初年次の共通教育と学習支援」ということになっております。皆さんがご承知かそうでないか、定かではありませんが、こういう有名なことわざがあります。「やってみせ 言って聞かせて させてみて ほめてやらねば 人は動かじ」これは山本五十六の言葉であります。実際に教員というのは、こういうことを繰り返すのかなと思います。

この山本五十六の言葉のその次を、調べてみました。「話し合い、耳を傾け、承認し、任せてやらねば、人は育たず」というのがありますし、「やっている、姿を感謝で見守って、信頼せねば、人は実らず」というふうに、山本五十六が言ったと残っております。

山本五十六の語録を紹介させていただきましたが、このような言葉は、初年次教育の肝みたいなところを示唆する様に思います。初年次教育というのは、大学に入ってきたばかりの若者を対象としていますが、18 歳で大学生になるのは、グローバルな世界では稀であります。高校を卒業したての若い人には、いろいろな人がいると思います。その中には、アスペルガー症候群のような子どももいると思います。一説によりますとアインシュタインも、アスペルガー症候群的であったと言います。従いまして、コミュニケーションを取れない新生児にも無限の可能性もあるわけであり、真摯に教育する必要があるということになると思います。

私どもは、とにかく教えるんだということで頑張っているわけでありまして。私も長い間教員をやっており、自分の担当する科目を教えた、教えたという気持ちでやっておりました。でも、最近言われている様に、何を教えたのかということよりも、学生は何を学んだのかということが大事であろうということを実感しています。

そういう意味で、大学に入った若い人たちにどういうふうに教育の現場で接するのかということは、大事だろうと思います。よく、五月病でありますとか、大学に入ったものの、将来の展望を持ってない学生が多いと言います。これは、今の若者に共通して見られることかもしれません。従いまして、初年次教育が将来を考える動機づけのようなものになることが大事であろうかと思えます。

今日は、三重大の中川正先生に、三重大の初年次教育とピアサポーターの養成の取り組みのお話をしてもらい、学内のお二人の先生にそれぞれの学部での教育のお話をさせていただきます。このテーマは普遍的であり、かつ重要でありこの時期に最適だと思います。

今日の午後、このセミナーによりまして、こういうような領域の知識を深掘りし、いろいろ考えることが非常に大事なことだと思います。有意義な FD 研究会になればと願っております。よろしく願いいたします。

## 講演 1

### 三重大学の初年次教育と ピアサポーター養成の取組み

中川 正  
(三重大学 学長補佐)



【中川】 本日は、お招きいただきありがとうございます。岐阜大学には何度も非常勤で来させていただき、また連携事業を通して交わりさせていただいています。同じ名古屋近辺の地方大学として今日は岐阜大学の教育改革から学ばせていただきたいと願って参りました。

三重大学は、5学部が1つのキャンパスにあります。学士課程には、6,200名近くの学生が在籍しております。

三重大学の教育目標は、「感じる力」、「考える力」、「コミュニケーション力」、および総合力としての「生きる力」の育成です。この「4つの力」は、「学士力」とほぼ対応しています。「幅広い教養」とか「専門的知識・技術」以外は、「ジェネリック・スキル」と呼ばれる、一般的な、どこに出ても適応できるような力です。学士課程修了時までには、この一定程度身につけたいということが、私たちの目標になっております。

この「4つの力」を育成するために、3つの柱がございます。1つは、「4つのカスタートアップセミナー」と呼ばれる初年次セミナー、2番目の柱は、問題発見解決型学習（PBL）の全学的な推進、3番目の柱は、共通教育を舞台として展開するキャリア教育の充実です。

三重大学のディプロマポリシーに関わる初年次教育やキャリア教育は、この図のように位置づけられます。教育の質保証は、分野別質保証だけではなく、教養教育とキャリア教育も重要となります。すなわち、大学の出口における質保証は、この3つの領域をカバーする必要があります。出口における学生の身につけた資質を保証する責任は、基本的には学部にあります。共通教育にもかなりの役割を担う必要がございます。ですから、共通教育で分担できる部分、そしてまた専門教育でやらなくてはいけない部分を組み合わせ、卒業に持っていかなくてはならないと考えております。

「4つのカスタートアップセミナー」は、専門基礎や教養教育として位置づけられますが、同時に、キャリア教育の基礎という位置づけもございます。この「4つのカスタートアップセミナー」は2009年度より全学的に展開いたしました。

第1期中期目標期間におきまして、三重大学はこの「4つの力」を育成するために、PBL（問題発見解決型学習）の推進を図り、共通教育にPBLセミナーを導入しました。また各学部でも、特徴のあるPBL教育を推進するために、マニュアルの整備を行い、Moodleと呼ばれる情報基盤を整備しました。それから、「4つの力」を測定する修学達成度評価システムを作りました。就学達成度評価は、心理尺度を用いて行う評価アンケートであり、入学時にまず行い、それ以後は、毎年後期の授業の履修申告をするときに、そのテストをしないと履修申告ができないというシステムにしました。その結果、1年から4年にかけてどのように修学達成度が変化したかを測れるようになりました。

これらの手法に関しましては良い評価を受け、「4つの力」自体も向上はしましたが、「4つの力」の内容自体を理解させて、継続的に育成を促進する仕組みというものはないという指摘を文部科学省よりいただきました。それで、この部分も整備しなくてはいけないと判断し、この「4つの力」を直接的に教えて、学生自体にも意識化させるための初年次必修授業が必要だということになったわけです。

当時、初年次教育は、それぞれの学部でしていました。ただ、教育の内容にも方法にもかなりのばらつきが存在しましたし、全学的教育目標も定着しない状況でした。「4つの力」の育成という教育目標は、学内の手続きをきっちりと踏んで制定されたものですが、教員にはそれぞれの教育理念がございますから、妥協できない部分もあり、異論が多くありました。そのような議論は大切なのですが、多様な解釈を許したままで大学としての教育改革を推進することはできませんので、「4つの力」の定義付けや、育成方針を明確化する必要があると判断しました。

この「4つの力スタートアップセミナー」は"4SUS"と表現されます。質の一貫した初年次教育を統一プログラムで作成するために、高等教育創造開発センター（HEDC）の関係教員と少数の特任教員によって、授業の立案をいたしました。そして、教育目標を定着させるために、それぞれの授業がこの「4つの力」のどこの部分を育成するのかということを明示するようなシラバスの統一化を図りました。

2009年度からの概算要求で、この初年次教育を徹底させるという予算も取りました。そのために、2008年9月ぐらいからプロジェクトチームを構成し、金曜日の午前中、3時間ずつかけて検討しました。そのときに、初年次に必要だと思われるスキルを皆で出し合い、学習に関わる授業案を各教員が作成して統合しました。

しかし、先ほども申しましたように、教員にはやはり、「これはどうしても必要だ」とか「このような方法で教えなくてはいけない」という、個性豊かな考え方がありますので、大枠づくりまでは何とかいくのですが、学生に現場でそれがどう受け止められるかということに関しては、危惧されました。かといって、先生方の合意を取るために無理をすると、どうしても紛糾してしまいます。

学生に対してスムーズに授業を行うことを可能にするために、授業が始まる1か月前の3月に4SUSに携わる若い特任の先生3人に、模擬授業をしていただきました。現場で、大卒の授業を実践し、学生には理解しづらい部分などを、特任の先生方の判断で修正し、さらに検討会をしながら最終案を作成し、4月からの授業を開始しました。

この全学必修化のために、基本的には、学部の先生方の手は煩わせず、特任教員とHEDCで教案作成に関わった教員たちで実施するというところで、合意を取り付けようとしてきました。2008年11月に、共通教育センターの運営会議で提案しました。委員が各学部を持ち帰って、学部での検討が開始されました。そして、12月の運営会議で、医学部、工学部、生物資源学部は必修化ということをお認めいただきました。人文学部と教育学部へは、理事と副学長が出掛けていきまして、説明しましたが、この両学部では、1年目からの必修化は実現できず、選択という形で開講ということになりました。その結果、2009年4月から、3学部必修、2学部選択で開始しました。2010年4月からは、教育学部も加えて4学部で必修化がされています。人文学部は、今でも必修化はされていません。とはいえ、2013年度においては、人文学部の大体過半数は受講しているという形になっておりますので、4学部では必修化、人文学部の過半数という形の受講形態となっております。



ります。

授業の内容のお話をさせていただきます。

まず、授業の狙いは、本学の教育目標「4つの力」を周知することです。後でも説明しますが、最初、授業アンケートでよくあることは、先生の声が大きかったり、小さかったり、板書が大きい、小さい、分かりやすい、分かりにくいと先生の評価ばかりを最初はさせていたのですが、それでは学生の力が身につかないと気づきました。授業アンケートを改訂し、どの力を自分が身につけたのかという自己省察の機会にすることとし、この「4つの力」というものが自分でどの程度身につけたかということ振り返らせることにしました。

3つの力、「感じる力」「考える力」「コミュニケーション力」の下位項目は全部で17あります。ですから、その17はどういうものなのかを自己評価するためには、その資質がどのようなものかを知る必要があります。ですから、各回のテーマに、身につける資質に関する下位要素が少なくとも1つは相当するような形で授業を組みました。

同時に、学生同士の関係づくりに力を入れました。入学したばかりの学生はなかなか他の人と討論したり議論したり、グループで何か会話をしたりすることは、得意ではありません。ですから、ある程度自分の居場所を明確化させた上で、話し合いができるような仕掛けを作ろうとしました。同時に、大学に適応して、学習スキル、図書館で調べたり問題を発見したり、グループワークで多様な意見をまとめたり、それを序論・本論・結論と持っていったり、そしてそれをプレゼンテーションにまで持っていくような学習スキルをとにかく獲得する必要があるだろうと考えました。さらに、PBLの導入ということで、PBLに必要な学習スキルの獲得も考えました。

各回の授業の構造ですが、1クラス40名です。基本的には同じ学部学科による編成です。混成ということも考えたのですが、学部学科で必修授業がございます。体育、コンピューター関係の情報処理、英語、第2外国語とかがありますので、なかなか学部ごとでない時間が設定できないことがあります。

40人クラスでは、比較的大きな可動式の机に2人ずつが座って、後ろを向けばそのままグループワークにできるようにしました。場合によっては、その2つの机はつけられる形とし、このような作業が可能なPBL教室を3つ造りました。40人クラスに4人1組のグループができますので、1クラス10グループができます。座席の場所を決めて、学籍番号順に、機械的にグループを作りました。

入学した段階では、人とコミュニケーションするのが得意ではない学生がいます。4人グループの中で、「こちらの人がAですよ」「こちらの人がBですよ」「こちらの人がCですよ」「こちらの人がDですよ」と決めて、最初はAの人がBの人に、Cの人がDの人という形で、「30秒、この話をしてください」「30秒は聞くだけにしてください」「はい、今度はこっちが30秒」という形で、対話に慣れさせます。4週間ほどすれば、放っておいても議論できるようになりますが、最初は誘導が必要です。

そのような形の、1クラス40名、4名×10グループという形にしまして、各回の基本構造は、その回のトピックについてグループで議論・理解して、議論・理解した内容を使ってプロジェクト活動をするという形になっています。

15回の内容は、このとおりになっています。最初、「導入、大学での学び(モチベーション)」。これは、括弧で書いてあるのは、この17の力のうちのどれを身につけるのかということを目指と

したものです。「グループ活動の基本」が2回目。「アイデアの発想」「テーマの設定」「情報の種類と特徴」「計画の立て方」「情報収集における手順とマナー」「プロジェクトのピアレビュー」「情報の吟味」「レポートの作成」「発表の方法」「プロジェクト発表と評価」「プロジェクトのふり返り」「全体のふり返り」というような形になっています。

年度によって、プロジェクトの内容は違います。最初の年は、「私たちの考える三重大学の魅力」というような形でします。そのときに、プロジェクトの進行に応じて、「4つの力」の下位項目の育成が図られるような形にしました。

例えば、これは第4回の「テーマ設定」の回では、最初の10分間で流れの説明とか、今までやってきた課題を集め、活動1では課題の共有ということでグループワークをします。そして、それに関しての解説をした後で、グループプロジェクトの遂行をします。KJ法を使いました。それで、まとめ・次回の予告という形で、大体グループワークが2回ずつ進む形で、毎回の授業が行われます。

この「活動1」、先ほど見たところですが、「私の見つけた"三重大学の魅力"」というものの情報共有、準備を各自1分して、各1分掛ける4人で6分間、情報共有すると。書いてきたカードを貼り付けていくという作業です。テーマ探しを設定して、全体でのデモンストレーションへ持っていくということをします。

「活動2」では、「三重大学の魅力をアピールする」ということで、テーマ探しをし、みんなの意見・情報を整理して、みんなの情報の整理をして、個々人でグループを分担して、さらに収集すべき情報の整理をグループ作業でしています。

授業のために統一テキストを作りました。2010年からは、作成に着手します。統一プログラムですので、毎週、31クラスが同じプログラムで進みます。そのうちの1つを実験授業にしており、その実験授業が終わってから、検討会をしております。そして、それに基づいて修正をし、毎年少しずつ改訂しつつ、統一テキストを作りました。

成績評価ですが、個人の活動が40%、グループ活動が60%です。個人の活動の内容としましては、毎回授業ふり返りシートを使ったふり返りを行わせます。ふりかえりシートの上部に「第6回」と書いてありますね。問題解決力をテーマにしていますので、計画の重要性を理解し、プロジェクト遂行に必要な作業を提案できたか。「6-1 大学生や社会人にとって、計画を立てる能力はなぜ重視されるのだろうか？」というのを自分で書けるようにします。2番目には、「計画を立てる際には、どのようなことを考慮すべきだろうか？」と書く。右側にまたそれ以外のことを書くという形で、各自振り返りシートを書くようにしています。

グループ活動ですが、グループ・リフレクションシートを使います。目標の共有、計画・進行状況の共有、積極的な相互作用などをグループで振り返り、ハートマーク5つ分の3つぐらいを赤い色で塗ったりする形で出すわけです。次週に向けた課題・改善点という形で、グループでもリフレクションするような形にしています。

学習活動にどのような影響が出てきたかについて説明します。個人とグループの両面を毎回ふり返りをし、振り返りを習慣化しています。また、グループ課題を通して相互作用の機会が増加しています。授業内と授業外の学習活動を行っています。クラス内におけるプロジェクトの評価には、ルーブリックを使ってそれぞれのグループの発表の評価をさせています。ルーブリックの「情報の有益さ 実用性」という観点では、Level1は、「実用性・有益性ともに乏しい」、Level

2は、「実用性はあるが、大学生活というテーマからはやや離れている」、Level 3は「これから大学生活を送るうえで有益な情報であると思うが実用性が低い」、Level 4は「これから大学生活を送るうえで有益かつ実用性の高い情報が提供されている」との基準を指示し、それに対応した評価をさせています。それぞれの発表がこの1、2、3、4のどれに当たるかということが、Moodle上に回答できるようになっています。「内容・表現」ということに関しても、同様に評価させます。そうすると、次の週までにそれぞれの学生たちが互いに評価したものの結果が出てきます。

ルーブリックを用いるメリットは、評価の信頼性、妥当性、正当性がある程度保証できることです。デメリットは、説明・理解が困難で、時間を要します。ですが、初年次教育でやっておくと、それから後のルーブリックを行うときには少し経験があるので、役立ちます。

それから、学生指導・支援に関して説明します。まず、4SUSを通して、欠席がちな学生についての連絡、組織的な体制というものが取れます。基本的には、クラスの中で4人がいつも一緒に学んでいますので、誰かが休んだら学生同士で連絡を取っています。ですから、欠席も遅刻も少ないです。それに、学生総合支援センターを中心とした学部への連絡を行っています。3回連続して欠席しますと、学生総合支援センター長に連絡が来ることになっています。そうすると、学部の学生委員会に連絡が行って、それで担任に連絡が行って、2週間以内に本人や親と連絡を取って、また報告を頂くという形になっています。実際には、3回連続して欠席する学生は少ないのです。2011年度には、1,200名以上の受講生の中で、報告があった学生は8名だけでした。2012年度は2名に減りました。2013年度は5名でした。ですから、この「4つのカスタートアップセミナー」を通して、1年のときに落ちこぼれる率はかなり減ったと思います。

また、気になる学生についての情報共有というものも個別にしております。

後でまた話しますが、上級生による学習支援があります。2年生になると、SAになるためには、「学習支援実践」という科目を履修しなくてははいけません。そのうちの1つが、この「4つのカスタートアップセミナー」のファシリテーションです。30クラス前後の4SUSクラスがありますから、「学習支援実践」履修者は、そこに実習生として派遣されるわけです。そして、水曜日の5コマ目に集まって、「学生がこの内容をよく理解できていたか」「つまづいているのはどこか」「あるグループでは1人が牛耳っていたけれど、あれはどうすればいいんだ」とか、「あるグループでは全員が沈黙を守っていたけれど、あれはどうすればいいんだ」というのをみんなで話し合います。これが「4つのカスタートアップセミナー」に絡めた上級版の授業として、準備しております。

その他、図書館ツアーをしています。さらに、全学的な修学達成度評価のアンケートを実施しています。また、教育支援ツール、eポートフォリオなどの紹介もしております。

「4つのカスタートアップセミナー」で、この「4つの力」についてある程度学生が理解しますと、この授業に限らず学期の終わりに、どの授業においても、専門も共通も全部、全ての授業において、学びの振り返りシート、いわゆる授業アンケートというのをやります。それには、「4つの力」に関する項目、すなわち「感じる力」が成長したか、「考える力」が成長したか、「コミュニケーション力が成長したか」、「生きる力が成長したか」といった項目があります。それから、「4つの力」の下位項目に関しては、身についたと思う項目をチェックするという形で、それぞれの授業で学生に振り返らせるようにしております。この成果に関しては、また後でご紹介します。

あと、初年次でどうしてもしていかなくてはいけないのがキャリア教育です。入学時から出口を意識させることが重要な課題になってきます。そのときに、「4つのカスタートアップセミナー」を土台にして、専門につないで社会へ送り出すという仕組みが必要になります。社会に送り出すためには、自立性と社会性を身につけなくてはいけない。自己省察の習慣化を「4つのカスタートアップセミナー」で行って、小グループにおける社会性の養成をします。それを専門教育というものに結ぶ前に、やはり共通教育の中である程度、学内における社会性の養成が必要になってきます。同時に、職業観の養成も必要になります。そうすると、この「4つのカスタートアップセミナー」をある程度土台にしながらも、発展版のキャリア教育が必要になってきます。

このような問題意識から、「キャリア・ピアサポーター資格教育プログラム」を作りました。「4つのカスタートアップセミナー」に、キャリアガイダンスの授業である「キャリアプランニング」、さらに「キャリア実践科目」と呼ばれる選択科目を、初級取得のための要件として整備しました。この「キャリア実践科目」は、幾つかの実践的な授業からなります。留学生支援、障がいのある学生の支援、キャリア支援、キャリアイベントの実施、オープンキャンパスなどで三重大学の紹介、広報誌作成、環境 ISO 内部監査など、学内の実践的な業務を授業化しました。

この3つを取れば、キャリア・ピアサポーターの初級になります。彼らは、キャリア・ピアサポーター学生委員会に参加が可能となります。

さらに、上級資格を取れば SA になれますので、初級を取った人は、「学習支援実践」と、「心のサポート」、さらに選択科目を2科目とれば、上級資格を取れます。この「学習支援実践」というのは、先ほど言いましたように、「4つのカスタートアップセミナー」に入り込んで、ファシリテーションを学ぶという授業です。そうすると、学生がこの上級授業において、1年前は受講生として、1年たったら先生側の意図も理解して、「4つの力」というのはこういうものだ、1年生と教員の間での役割をするようになります。

この「学習支援実践」を履修して SA になった人は、今度は「学習支援実践」のサポートに回ることができますし、「キャリア実践科目」の OB として、SA としてつくことができます。このように、学生が学生を支援するサイクルみたいなものをつくっています。

共通教育におけるキャリア教育科目をこういう形で整備していった結果、キャリア教育は、平成18年度で5科目だったのが、現在では40科目ぐらいになってきています。351名の受講だったのが、2,000名近くが受講するような状況にまでなってきております。

「キャリア実践科目」の内容は、この図の通りですが、「ピアサポート実践」はピアサポーター学生委員会、「留学生支援実践」は留学生支援室と結び付いています。「障がい学生支援実践」は障がい学生支援室、「キャリアイベント実践」はキャリア支援センター、「広報誌編集実践」は共通教育センター、「学生生活支援実践」は学生なんでも相談室、「大学紹介実践」は入試チーム、「社会連携実践」は社会連携センターという形で、事務組織とも結び付いて業務をしています。また、それぞれの授業を取った人たちが最後の報告を、共通の発表の場である「アカデミックフェア」で公開報告しています。そこでは、ポスター発表があったり、口頭発表があったり、さまざまなキャリア教育を受けた人が一堂に集まっています。さらに、その場には専門教育の発表や大学院レベルの発表もあります。それぞれが、専門外の人にも分かるような発表をします。共通教育のレベル、専門教育のレベル、大学院のレベルとさまざまありますが、それぞれ議論ができるような公開の場を作っております。

これらの一連のプログラムや発表会には、学生委員会やら教務委員会などの教員組織や、ピアサポーター学生委員会といった学生組織、学務部といった職員チームが連携して運営しています。

学内を職場にするためには、やはりしっかりとしたミッションが必要です。それで、2011年2月に学生支援方針を作りました。「三重大学にとって受け入れた学生は宝です。その宝が輝くように、教員、職員、学生が一体となって支援します」がその方針です。この方針は、**Appreciative Inquiry** と呼ばれるファシリテーション技術が用いているが4つの「D」を準用した体裁としました。「**Discovery**：学生の中に眠っている宝を探します」、「**Dream**：眠っている宝が最高に輝いた夢を描きます」、「**Design**：描かれた夢を実現させるステップをデザインします」、「**Destiny**：夢実現のステップを実践し、宝を輝かせます」が4つの「D」となります。

この4つの「D」のサイクルを図示しました。このキャラクターは、学生が創った「三重大サポ太」です。ネクタイはキャリアを意識したものです。ネクタイに記されているのは **Career Peer Supporter** の頭文字の **CPS** です。宝を探すのが好きな人もいるし、夢を描くのが好きな人もいるし、デザインする頭のいい人もいるし、実行力のある人もいる。これらの異なった強みを持った人々が、力を合わせて学生支援をやろうとすることを宣言したものです。この学生支援方針という使命の実現のために、キャリア・ピアサポーター学生委員会を使って、学内を職場とした社会性を育成して、それから専門につなぐということを考えているわけです。

ピアサポーター学生委員会は「キャリア・ピアサポーター宣言」というものを自らしまして、自らのミッションを明確化しています。資格取得者はこのように今は増加しております。

「4つのカスタートアップセミナー」を1年のときに受けるわけですが、それが2年になって、ファシリテーションをやった人がどの程度力がついたかということですが、やはり全ての領域にわたって学習支援実践をやると、力がついているというのが、少なくともこの図からは見て取れると思います。

それから、キャリア教育の成果です。共通教育の統合教育科目と呼ばれている教養科目の中には、主題がA、B、C、D、E、Fなどかありますが主題Iが4SUSとキャリア科目です。それぞれの程度学生の力がついているかという授業アンケートを少し集計したものを図示しました。

「4つの力」全てにわたって、キャリア教育はかなり力がついていることが明らかです。

「感じる力」に関しては、倫理観以外の領域ではかなりキャリア教育が力を果たしている。「考える力」では、いわゆる座学で身につくような幅広い教養とか専門知識・技術は主題A~Hが成果を上げていますが、主題Iでは、論理的思考力、批判的思考力、課題探究力、問題解決力といった問題解決レベルの思考力は比較的ついてます。「コミュニケーション力」も、情報受発信、討論・対話、指導力・協調性、また社会人としての態度というもので、比較的身につけているのかなと思っています。

ただ、このような成果は、なかなか学内にもまだ周知されていないものです。このような実績はあるのですが、教員には、変化が早過ぎるというような感覚があるようです。ですから、この部分が学内にどのように認知をされて、そこをうまく共通教育の学習プログラム、また必修とか履修指導みたいな形で生きてくるような形になればよいと思っています。

ありがとうございました。

## 三重大学の初年次教育と ピアサポーター養成の試み



中川 正

三重大学学長補佐 (キャリア教育担当)

## 三重大大学の特徴

- 5学部が1つのキャンパスに

Table 1 学士課程学生数

|        | 1年次   | 2年次   | 3年次   | 4年次<br>以上 | 合計    |
|--------|-------|-------|-------|-----------|-------|
| 人文学部   | 292   | 286   | 309   | 368       | 1,255 |
| 教育学部   | 215   | 208   | 212   | 249       | 884   |
| 医学部    | 205   | 213   | 219   | 456       | 1,093 |
| 工学部    | 418   | 407   | 445   | 566       | 1,836 |
| 生物資源学部 | 263   | 266   | 267   | 307       | 1,103 |
| 合計     | 1,393 | 1,380 | 1,452 | 1,709     | 6,171 |



## 三重大大学の教育目標 「4つの力」の育成

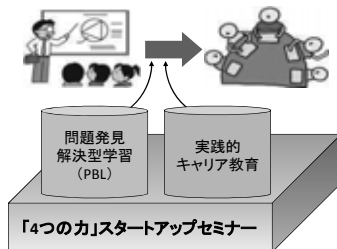


## 三重大大学の教育目標:「4つの力」の育成

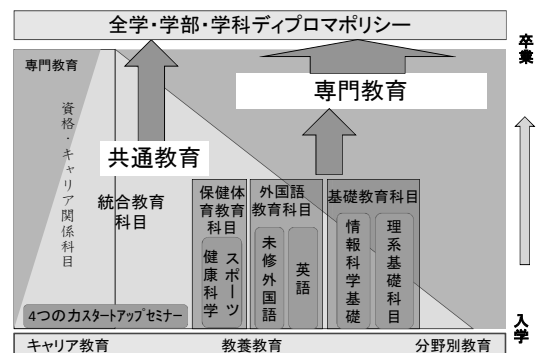
| 能力  | 領域             | 三重大大学の教育目標の「4つの力」  |  | 中教養、文部科学省の「学士力」 |                         |                                |                 |
|-----|----------------|--|--|-----------------|-------------------------|--------------------------------|-----------------|
|     |                | 感じる力   | 考える力                                     | 知識・理解           | 汎用的技能                   | 態度・意向性                         | 総合的な学習能力と社会的態度  |
| 個人的 | 情動的<br>(感情と態度) | 感性<br>共感<br>倫理観<br>モチベーション<br>主体的学習力<br>心身の健康に対する意識      |  |                 |                         | 倫理観<br>自己教育力                   |                 |
|     | 認知的<br>(知識と思考) | 幅広い事象<br>新学的知識・活用<br>論理的思考力<br>批判的思考力<br>問題解決力<br>創造的思考力 | 多文化・異文化に関する知識の理解<br>人間の文化、社会と自然に関する知識の理解 |                 | 数値的スキル                  |                                |                 |
| 社会的 | 情報・認知          | 情報活用能力<br>判断・対応力<br>社会人としての態度<br>柔軟性、臨機応変<br>外国語力        |  |                 | 情報リテラシー<br>コミュニケーションスキル |                                |                 |
|     | 総合的            | 感じる力、考える力、コミュニケーション力を<br>総合した力                           |  |                 |                         | 市民としての社会的責任感<br>チームワーク、リーダーシップ | 総合的な学習態度と創造的思考力 |

## 「4つの力」を育成するポイント

- 「4つの力」を知る ⇒ 「4つの力」スタートアップセミナー
- 能動的なグループ学習 ⇒ 問題発見解決型学習(PBL)
- 実践的な社会訓練 ⇒ 学内を職場とした実践的キャリア教育



## ディプロマポリシーに関わる初年次教育とキャリア教育の位置づけ



## 「4つの力」スタートアップセミナー

全学統一での実施  
～経緯と現在の体制～



6

## 第1期中期目標期間の成果

- 全学的なPBL(問題発見解決型学習)の推進
- Moodleを通じた情報基盤の整備
- 「4つの力」を測定する修学達成度評価システムの作成

7

## 「4つの力」は向上

|            | 2005年度 | 2007年度 |
|------------|--------|--------|
| 感じる力       | 0.51   | 0.61   |
| 考える力       | 0.65   | 0.66   |
| コミュニケーション力 | 0.57   | 0.58   |
| 生きる力       | 0.59   | 0.62   |

PBL、Moodle、評価システムの環境は整った  
→さらに、「4つの力」の内容自体を理解させ、継続的に育成を促進する仕組みが必要

8

## 一貫した初年次教育システムの必要性

教育の質にばらつきが存在  
教育目標が定着しない



### 4SUS設置の目的

- 質の一貫した初年次教育(統一プログラム)  
=高等教育創造開発センター(HEDC)関係教員と少数の特任教員による授業の立案・検討・実施
- 教育目標の定着=全学共通シラバス

9

## 授業内容の構成に向けた取り組み

- 2008年9月～  
本格的な検討開始(メンバー:HEDC教員10名)  
- 「初年次に必要だと考えられるスキル」の  
- 学習に関わる授業案を各教員が作成して統合、  
15回の授業案を作成。
- 2009年3月～  
- 特任教員3名が模擬授業やHEDC教員らとのミーティングを行いながら、具体的な授業案を作成

10

## 全学必修化に向けた取り組み

- 2008年11月 共通教育センター運営会議  
(委員が学部を持ち帰り、学部での検討開始)
- 2008年12月 共通教育センター運営会議  
(追加資料の送付&学部への持ち帰り)  
- 医学部・工学部・生物資源学部は必修化  
- 人文学部、教育学部にはさらに直接の説明
- 2009年4月～ 3学部必修、2学部選択で開始
- 2010年4月～ 教育学部を加えた4学部で必修化  
(授業担当の特任教員を専任として採用)

2013年度において 31クラス1,243名受講

11

## 「4つの力」スタートアップセミナー 授業内容・授業構成



12

## 授業のねらい

- 本授業のねらい
  - 本学教育目標「4つの力」の周知
    - 4つの力と17の下位要素
    - 各回のテーマに下位要素が1つずつ相当
  - 学生同士の関係づくり、大学への適応、学習スキルの獲得
  - PBL教育への導入、PBLに必要な学習スキルの獲得

13

## 授業の構造とクラス編成

- 授業の構造
  - グループ活動を多用した授業
  - 各回の基本構造

その回のトピックについて、グループで議論・理解



議論・理解した内容を使って、プロジェクト活動

- クラス編成
  - 基本的に、同じ学部学科による編成
  - 1クラス40名、4名×10グループ
  - 合計31クラス(2011年度)

14

## 全15回の内容(3~14回はプロジェクト活動)

| 回 | テーマ(主に意識する力)         | 回     | テーマ(主に意識する力)         |
|---|----------------------|-------|----------------------|
| 1 | 導入、大学での学び(モチベーション)   | 8     | プロジェクトのピアレビュー(感性、共感) |
| 2 | グループ活動の基本(社会人としての態度) | 9     | 情報の吟味(批判的思考力)        |
| 3 | アイデアの発想(感性)          | 10    | レポートの作成(論理的思考力)      |
| 4 | テーマの設定(課題探求力)        | 11    | 発表の方法(情報発信力)         |
| 5 | 情報の種類と特徴(情報発信力)      | 12-13 | プロジェクト発表と評価(統合力)     |
| 6 | 計画の立て方(問題解決力)        | 14    | プロジェクトのふり返し(統合力)     |
| 7 | 情報収集における手順とマナー(倫理観)  | 15    | 全体のふり返し(統合力)         |

15

## 基本的な授業の流れ

|       |            |    |               |           |    |
|-------|------------|----|---------------|-----------|----|
| 0(分)  | 10         | 40 | 55            | 80        | 90 |
| 流れの説明 | 課題の共有(活動1) | 解説 | グループプロジェクトの遂行 | まとめ・次回の予告 |    |

参考)第4回授業:テーマ設定



16

## 活動1



- 議題(前回課題)  
私の見つけた“三重大の魅力”
- 情報共有(準備1分+各1分×4~5=6分間)
- テーマ探しと設定:全体でのデモンストレーション

17



## 活動2



- 「三重大大学の魅力をアピールする」プロジェクト作業①

### テーマ探し

- みんなの意見・情報の整理(個々人での作業)
- みんなの情報の整理(グループで)、個々人で/グループで分担してさらに収集すべき情報の整理(グループ作業)

18

## その他、授業に関わること

- 統一テキスト
  - 2010年から作成に着手、2011年から使用
  - 毎年、少しずつ改訂
- 担当者によるミーティング
  - 週1回の実施
  - 各クラスの情報共有と今後に向けた改善方針

19

## 成績評価の方法

- 個人の活動(40%)
  - 毎回のふり返し(授業ふり返しシート;次スライド上)
  - 授業全体のふり返し(ふり返しと今後の目標シート)
  - Moodleにおけるふり返し課題
- グループ活動(60%)
  - グループ活動のふり返し(グループ・リフレクションシート;次スライド下)
  - プロジェクトに関する提出物
  - プレゼンテーションに対する評価(学生・教員)

※無断での遅刻欠席、提出遅れや、図書館ツアーへの不参加などは減点対象

20

個人:授業振り返りシート

グループ:グループリフレクションシート

21

## 学習活動への影響

- 個人とグループの両面を評価
  - 両面の評価により個人志向、協同志向の学生に対応
  - グループ課題により相互作用の機会が増加
- 授業内と授業外
  - ふり返しによる、学びの定着
  - 授業外学習の推進
  - CMSの活用によるICTリテラシーの向上
- プロジェクトの評価の学生参加
  - 学生自身も評価に参加
  - 評価の正当性、他のグループに対する責任
- ルーブリックによる評価(次スライド)
  - パフォーマンス評価
  - 次の目標設定

22

### 第12・13回 プロジェクト発表の評価基準

プロジェクトの相互評価は、以下の6観点について行います。発表準備、リハーサルに活用しましょう。

| 観点 | レベル     | 評価                               |
|----|---------|----------------------------------|
| 内容 | Level 1 | 発表内容が不明確で、聞き手が理解しにくい             |
|    | Level 2 | 発表内容があるが、大まかすぎるため聞き手が理解しにくい      |
|    | Level 3 | この分野の専門知識を伝えることができており、聞き手が理解しやすい |
|    | Level 4 | この分野の専門知識を伝えることができており、聞き手が理解しやすい |
| 形式 | Level 1 | 発表内容が不明確で、聞き手が理解しにくい             |
|    | Level 2 | 発表内容があるが、大まかすぎるため聞き手が理解しにくい      |
|    | Level 3 | この分野の専門知識を伝えることができており、聞き手が理解しやすい |
|    | Level 4 | この分野の専門知識を伝えることができており、聞き手が理解しやすい |

### ルーブリックの例

- 多面的評価のメリット・デメリット
  - 評価の信頼性、妥当性、正当性を保証
  - 説明・理解の困難さ、管理のコスト増加

## 学生指導・支援の役割

- 欠席がちな学生についての連絡:組織的体制
  - 学生総合支援センターを中心とした学部への連絡
    - 欠席が連続する(3回)学生を担当者が連絡
    - センターから学部の担当教員に報告
- 該当学生数 2011年度:8名 2012年度:2名 2013年度:5名
- 気になる学生についての情報共有
  - 学部の教員と個別に情報共有
- 上級生による学習支援
  - 学習支援実践

24

## その他の役割

- 図書館ツアー
  - 附属図書館と連携し、ツアーの実施
  - ツアーへの参加やワークシートを評価の一部に
- 全学的な教育評価
  - 修学達成度評価の配布、回収
  - 授業評価をWebで実施、第15回で結果を学生にフィードバック
  - ⇒教育評価の目的や重要性についても説明
- 教育支援ツールの紹介
  - eポートフォリオ

25

## 「4つの力」スタートアップセミナーで学んだことを活かし 三重大で開講されるすべての授業で学びの振り返り

### Ⅲ. 4つの力に関する項目③

下の項目についてあてはまると思う数字を選び、別紙マークシートにマークしてください。「4つの力は職業科学習も受取、文学生としての活動のすべてを通じて身につけるものです。さらに、各授業において、4つの力の養成には留意がなされています。その意味で、いくつかが「成長しなかった」でも結構です。4つの力のすべてに留意してください。」

|                             | 全く成長しなかった | わずかに成長した | 少し成長した | ある程度成長した | かなり成長した |
|-----------------------------|-----------|----------|--------|----------|---------|
| 1.0 この授業を通して、「聞く力」が成長したと思う  |           |          |        |          |         |
| 1.1 この授業を通して、「伝える力」が成長したと思う |           |          |        |          |         |
| 1.2 この授業を通して、「読む力」が成長したと思う  |           |          |        |          |         |
| 1.3 この授業を通して、「書く力」が成長したと思う  |           |          |        |          |         |

### Ⅳ. 4つの力に関する項目④

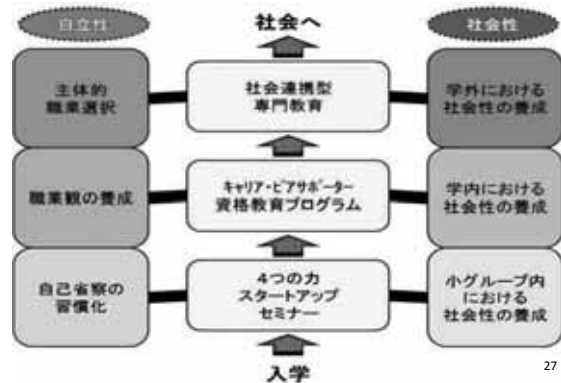
下記に示す「4つの力の養成事項」の観点について、この授業を通して成長したか否かを調べ、別紙マークシートに開講される授業毎のマークシートをマークしてください。いくつか選んでも構いません。

選ぶ力

|                |             |            |             |               |                |
|----------------|-------------|------------|-------------|---------------|----------------|
| 14. 読解         | 15. 英語      | 16. 情報     | 17. モチベーション | 18. 主体的学習力    | 19. 自身の課題に打ち勝つ |
| 20. 幅広い教養      | 21. 専門知識・技術 | 22. 継続的学習力 | 23. 批判的思考力  | 24. 問題解決力     | 25. 問題解決力      |
| 26. コミュニケーション力 | 27. 情報活用能力  | 28. 計画・対話力 | 29. 読解力・協働性 | 30. 社会人としての態度 | 31. 職業実践力      |

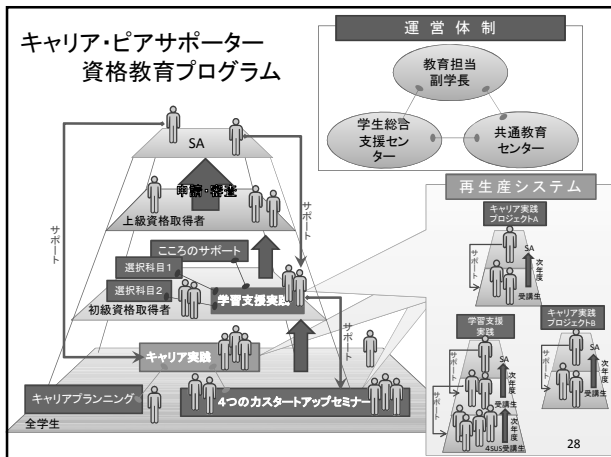
26

## キャリア教育の中での初年次教育の位置づけ



27

## キャリア・ピアサポーター 資格教育プログラム



28

## 共通教育キャリア教育・初年次セミナーの整備

- 18年度:5科目(351名受講)
- 19年度:7科目(665名受講)
- 20年度:15科目(1,352名受講)
- 21年度:12科目(943名受講)+ 4つのスタートアップセミナー【4SUS】(1,085名受講)
- 22年度:20科目(1,344名受講)+4SUS(1,171名受講)
  - ⇒共通教育主題「生きる力とキャリア形成」
- 23年度:25科目(1,846名)+4SUS(1,294名)
- 24年度:38科目(1,945名)+ 4SUS(1,307名)
- 25年度前期:20科目(1,084名)+ 4SUS(1,243名)

29

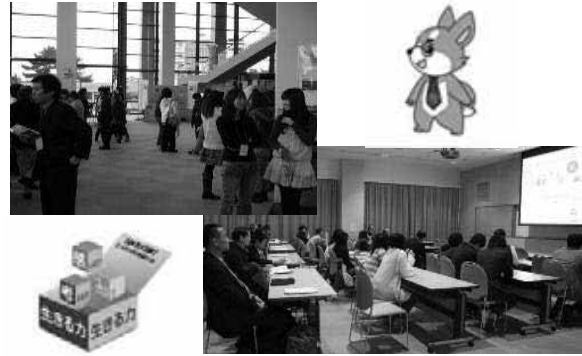
## キャリア実践科目の整備 学内を職場とした社会人基礎力養成

- ピアサポート実践 ⇒ ピアサポーター学生委員会
- 留学生支援実践 ⇒ 留学生支援室
- 障がい学生支援実践 ⇒ 教育学部特別支援講座
- キャリア・イベント実践 ⇒ キャリア支援センター
- 広報誌編集実践 ⇒ 共通教育センター
- 学生生活支援実践 ⇒ 学生なんでも相談室
- 大学紹介実践 ⇒ 入試チーム
- 社会連携実践 ⇒ 社会連携センター

• ⇒アカデミックフェアを通じた連携

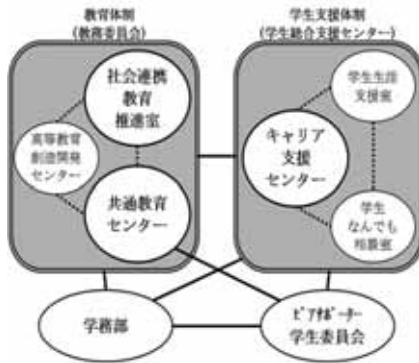
30

## アカデミックフェアを通じた公开发表



31

## 教員・職員・学生による協働体制の構築(2011年度)



32

## 学生支援方針 学内を社会とした使命の明確化

- 三重大学にとって受け入れた学生は「宝」です。その宝が輝くように、教員、職員、学生が一体となって支援します。

### 学生支援の4つのD

1. Discovery: 学生の中に眠っている宝を探します。
2. Dream: 眠っている宝が最高に輝いた夢を描きます。
3. Design: 描かれた夢を実現させるステップをデザインします。
4. Destiny: 夢実現のステップを実践し、宝を輝かせます。

33

## 学生支援方針に基づく使命感の醸成



34

## ピアサポーター 学生委員会誕生

2011年2月11日  
発足記念式典  
キャリア・ピアサポーター宣言をする



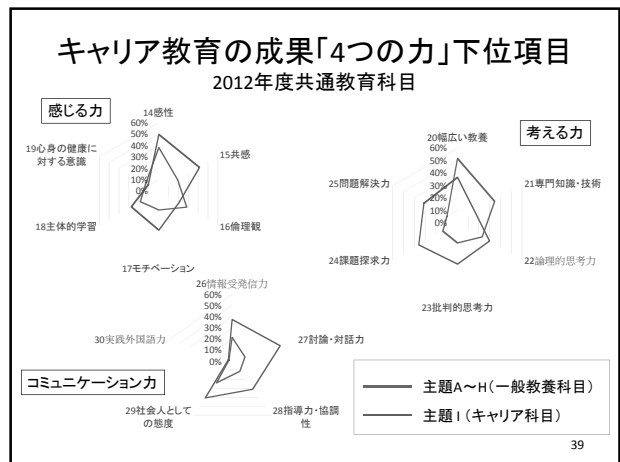
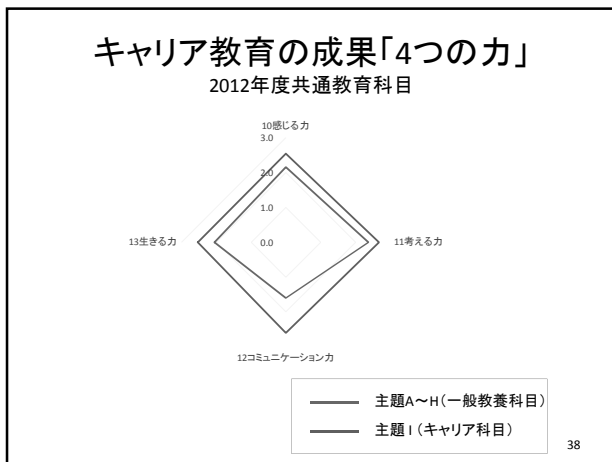
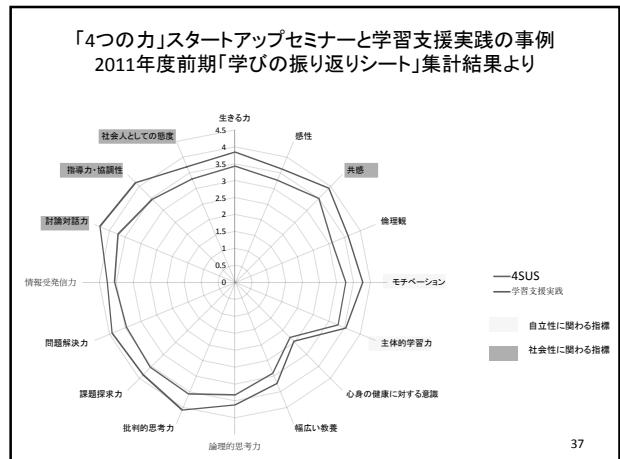
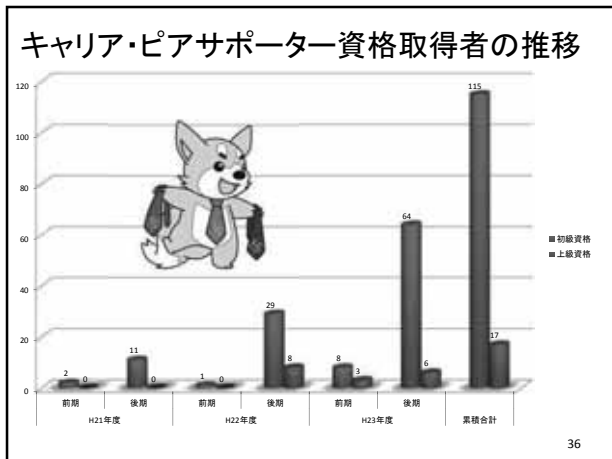
## キャリア・ピアサポーター宣言



キャリア・ピアサポーターは、  
多様な教育環境や学生・教員・職員の連携・協働を活かして、  
学生が自らの可能性を見つけるきっかけづくりをします。  
そして、人とのつながりを大切にし、  
大学全体でともに高め合える風土づくりを目指します。

2011年2月11日  
ピアサポーター学生委員会

35



ご静聴ありがとうございました

nkgw@human.mie-u.ac.jp

## 手探りの初年次セミナー ：工学部での取り組み

青木 正人（工学部 教授）



【青木】 工学部の青木と申します。よろしくお願いいたします。今お話を聞いていて、非常にまぶしいようなお話で、これから私がお話しするのはかなり原始時代みたいなところから始まる話です。「手探りの初年次セミナー」ということで、工学部での取り組みの一例をお話ししたいと思います。

工学部には現在4学科あります。その前は9学科ありまして、たくさんの学科がありました。それぞれ学科単位で初年次セミナーが行われてまいりましたので、それぞれ特色を持ってやられているはずなんですけど、お互いにどういうことをやっているのかよく分かっていないという状況のまま進んでいます。

ここでお話しするのは、私の所属していた数理デザイン工学科及び現在の電気電子・情報工学科応用物理コースとして行っている実践についてです。現在の実践については、三宅先生から後半部分でお話しいただきます。

まず、これは工学部学生が受ける初年次セミナーは、昔は初年次セミナーとは言わず、教養セミナーでした。原始時代と呼んだのは、初めてこの教養セミナーができ上がったところで、まだ教養部がありまして、教養部の教員が1クラス20人で、助言教官という立場にもなりつつ、学生と一緒にいろんなセミナーをして、本を読んだりソフトボールなんかもしたり、いろいろ会話をしたりやっていました。目的は、高校と大学での学業の相違を認識すること。大学生活になじんで状況をつかんで、どういう方向に自分が進むかということを考える、そういう機会を与えるところでした。

そのうちに教養部が改組というか消滅しまして、フレッシュマンセミナーというのが工学部に關しては設定されました。他の学部については、教養セミナーなんですけど、工学部では実施主体が工学部の6学科になりました。したがって、各学科で何をやるか考えなければいけないという、今までやったこともないようなことを考えなければいけないという状況になりました。なぜそういうことをやるのかという背景はその次にお話ししますが、この初年次セミナーに相当するフレッシュマンセミナーと同時に、「現代テクノロジーの展開」という、学生たちに工学の面白さとかいろんな概論的な話であるとか最前線の話、興味を持ってもらう話、キャリアにもつながるような、そういう話をする授業も並行して行われていました。

こういうフレッシュマンセミナーが始まって、この冊子は岐阜大学の自己評価の一環で98年に出版されたものですが、学科主体型のセミナーとして、工学部ではフレッシュマンセミナーを始めた。「『フレッシュマンセミナー』は本年度初めて実施されたもので、教官の準備にも不備な点も見られた。教官として一層の努力をしなければいけない」と、そういう結び方でありました。つまり、簡単じゃないということです。

さらに、3年後に、「21世紀に新たに飛躍する岐阜大学」という、これも自己評価的な、岐阜

大学はどういう改革をやってきたかという冊子が編さんされて、その中で、『現代テクノロジーの展開』や『フレッシュャーズセミナー』によって動機付け教育が行われ」と。しかし、「大学での学修に対する確固たる目的意識の醸成においてなお問題を残している」という、ここでもやはりなかなかうまくいかないという自己反省が行われております。ですから、単なる準備不足で難しかったのではなくて、これは何かもっと深い理由があるということがだんだん分かってきました。その理由として、そこでは基礎学力の不足ということを挙げています。

その後、工学部は、6学科体制だったのが9学科に改組されて、私は数理デザイン工学科という少人数の学科に移りました。ですから、そこでまたフレッシュャーズセミナーは何をやるのか考えなければいけない。しかも、新入生にとっても今までなかった学科で、その学科には先輩もいないし、まだ就職した人もいない、そういう状況の中で、学生は不安を持つと思うし、どのぐらいの学力の学生が入ってくるかも分からない。そういう状況で、かなり重要な科目ではないかということ、初めて強く認識しました。

その後、世間では、文科省、経産省など国を挙げて、いろいろな「社会人基礎力」の定義だとか「学士課程教育の構築に向けて」の中教審の答申だとか、あるいは岐阜大学でも「基盤的能力」というものが最近定義されて、こういったことをより精密に、統一した規格でやろうという機運が高まってきていたわけです。現在は初年次セミナーということで、また工学部は改組しまして、4学科・9コース制になってやっています。

これから、昨年までの数理デザイン工学科においてどういうことを考えて、何をやってきたかということをご紹介したいと思います。

まず、背景としまして、今の高校を卒業し、大学に入学してくる学生たちは、たぶんこんなことは皆さんもう既に百も承知と言われることかもしれませんが、受験でマークシートだとか、要するに答えがイエスかノーかみたいな、そういう問題ばかりやったり、限られた範囲の決まった答えがある問題ばかりをやっていたりして、なかなか体験とか経験が不足したりしているということがあります。大学ではかなり高度なことをやることを目標にしていますので、そこへ持っていくためには、まずこういう立場、こういう物の見方から見方を変えてもらうという転換教育が必要になるわけです。

それから、専門教育では、高校のときとは違って難しいことをやりますので、基礎から順番に吸収していくために、それをつないでいく導入教育をやる必要があります。いろんなモチベーションを高めるなども含まれます。そういうことが本当に必要になっているということが、社会的にも認識されてきたわけです。

これは、一緒にフレッシュャーズセミナーをやっていた浅川先生が別の機会に発表したものを持ってきたものですが、こういうように、言われたことだけしかないとか、棒暗記をしてしまったりとか、話し合いができないとか、先ほどの話も出てきたような、こういう特徴があるということです。

なぜこうなのかという理由は、彼らが別に悪いわけではなくて、必要ない能力だったからですね。今まで使う必要が、これは私がそう思うだけかもしれませんが、あまり必要がなかったと、使わなくてもちゃんと生きてこられたという、そういうことです。だったら、使えるような状況をつくってやろうと。もちろん、大学に入学して、いろいろの科目を履修していくためには、そういう能力が必要とされるわけですが、かなりギャップがあって、学生が苦しんでしまう。

だから、もう少し簡単な状況設定で、そういうことをやるテーマを考えてやる必要があるのではないかというわけです。

入学してきたらこのぐらいのことは当たり前だろうとわれわれが思っていたところとは違う、もっと手前のところでつまづいてしまったり、何でそんなことをやらなければいけないのかという疑問を今まで持っていなかったとか、そういう状況にある。ここをどうするかということです。

このフレッシューズセミナーでは、少人数学科で40人だったんですけれども、学科の教員をたくさん動員して、最初は情報リテラシですとか、数理デザインですので計算リテラシだとか、それからEメールを使って海外と交信をして、文化の違いとか、外国の大学生がどんなことを考えているかといったことを英語を使ってコミュニケーションして知ろうという企画であるとか、そういうことを考えました。

その中の特徴は、マニュアルが通用しない。だから、答えが1つに決まっていない。正解が必ずしもない。そういうもので、自分の頭を使ってチームワークも使ってやるとか、それから知・情・意の三要素、こういったものを本気で投入してできるような課題、そういうもので内発的な動機付けをする。それから、デザイン力、コミュニケーション力を発揮しないと達成できないようなタスクを与えることなどを考えて、授業を設計しました。

その中の1つがプレゼンテーションです。プレゼンテーションはたぶん、どこでもやられていると思います。われわれの学科でも、非常にそれに力を入れてやりました。まず、テーマを考えるとところから始めるわけですが、その問題意識がそもそもないところからテーマをどうやって考えていくか。そういうところから思考力とか、いろんなことを感じる力などを鍛えていくというものです。

最初の頃は、何といいますか、天気予報についてだとか学力低下についてとか、かなり自分たちでは手に負えないような課題を持ってきて、何か調べ物をして発表するというのを第1期の学生はやりました。これでは困るということで、次からはかなり学生と討論しながらテーマを決めていくようにしました。これじゃあ駄目だと言われた学生もたぶんつらかったと思いますが、こっちなかなかつらい立場で、ぶつかり合いながらやっていきました。学生たちが、発表が差し迫るなか、いろいろなテーマ、面白いものを考えて、自分たちで調べて、いろんな根拠付けをして発表するというのをやりました。

発表には必ず晴れ舞台をつくってあげました。こういう晴れ舞台があると、人間というのはやはり一生懸命、そこで恥をかかしくないように、恥をかかないように最後まで頑張ります。そういうのがないと、なかなかモチベーションが上がりません。ただ課題を提出すればいい、成績、点がちょっと変わるだけとか、そういうことではない緊張感、それが必要で、優勝したところには盾が贈られるというプレゼン大会をやりました。

これは、平成19年にマスターの1年にまで進学した北村君という学生が、教養の「アンゲリア」という冊子に寄稿した文ですが、1年の教養科目の中で一番印象に残ったのが、このフレッシューズセミナーでやったプレゼンテーションであったと。「グループ内で、問題の意識共有から始まり、議論を通じて一つの結論を出し、それを発表するという過程は、知識を超えた、人格的な素養を必要とする」と。こういうことは、教科書とか、数学や物理を学んでも得られないということを書いてくれました。まさにわれわれが喜ぶようなことを書いてくれたんですけれども、本当にそういうことを感じてくれていたのであれば、非常に嬉しいことでした。

その他、メールプロジェクトといいまして、これは先ほどちょっと触れましたけれども、スウェーデンにルンド大学がありまして、そこの日本語学科の学生と英語でコミュニケーションをして、向こうの学生、非常に優秀な大学ですけれども、彼らと時には日本語も交えてやりとりをします。そしてメールが来たら返事を書かなければいけない。返事を書くためには、英語で何か自分の考えていることを書かなければいけない。そういうことで、待ったなしの真剣勝負でメールのやりとりをしなければいけない。学生にとってはかなりきつい課題だったかもしれませんが、それがまた逆に、学生にとっては有益であった、そういう感想も得られています。文化の違いを知ったり、自分が当たり前だと思っていることが実はそうではないとか、向こうの学生はすごく頑張るとか、そういうことを吸収する、気付くことができました。

平成14年からこの授業を始めたのですが、最初はなるべく早く専門に慣れて、専門の面白さを知ってもらおうとか、勉強に役立つことを知ってもらおうということで、こういうコンピューター関係のリテラシー、こういうのが大部分を占めて、ちょっと最後にプレゼンをやるという形でやって終わりでした。ところが、そういうことでは、いいプレゼンがなかなかできないんです。深いところまで彼らは考えてやってくれない。そこで、プレゼンの分量を増やしていきました。それと同時に、先ほどのEメールプロジェクトで異文化交流を行って、コミュニケーションについては体験的に深く学ぶということをやりました。

これが、だんだん年を追ってどういうふうに変化していったかですが、赤いのがプレゼン、青いのがコンピューター・リテラシーみたいなものです。ピンクがメールプロジェクトですが、だんだんとプレゼンの回数が増えていきます。これは、プレゼンは非常に重要で効果があったということでもあり、また、短い時間でプレゼンを準備しても、なかなか深いところまで行かないと。そのうちに、教室会議などで、最近の学生の文章はなっていないという話になって、文書作法についてやることになりました。

そして、論理構造、論理についてもちゃんと学んで、論理的な文章を書こうということをやっているんですが、このあたりでかなり教員のほうもへばってきまして。論理学というと非常に難しくなってしまうのですが、われわれのやりたい論理というのはそんなに難しい論理ではなくて、普通に筋の通った文が書けるとかそういうことですが、なかなか教員の間でも意見が一致しなかったりして。しかも、われわれはそういう専門家ではありませんので、なかなか指導し切れない領域まで来た感がありました。そこで今年、三宅先生に入ってくださいました。その報告はこれからやっていただきます。

今までやってきた課題で、たぶん重たい課題ばかりお話ししたと思います。その中には願いがこもっていて、それはやっぱり基盤的能力みたいなものを本当に伸ばしてくれるような課題を与えたいわけです。正解のない課題を選び、体当たりで真剣に取り組まざるを得ない、そういう課題。それから、学生が、こういう基盤的な能力が伸びたということを感じることができたり、こういう能力がないと分かって必要性を感じたり、それを獲得しようというモチベーションが高まる、それを狙ってやってきました。

問題点というか課題ですけれども、実施主体、それからクラス編成、これがコース単位とか学科単位で本当にいいのか、誰が担当すべきなのか。初年次セミナーとかこういう今やっていた授業について、どういう程度の知見を持っている人がやるべきなのか、資格があるのか。到達目標はどこに置いたらいいのか。あまりやり過ぎてもいけないし、1年生で必要なレベルとはどこな



のか。それから、1年の後期とか2年以降の科目にどうやって継承してつないで、継続的・段階的に基盤的能力を育成していく仕組みができるであろうかと。それがカリキュラムに必要ではないかと。

それから、多くの教員は、学習心理学とか教育理論を研究しているわけではありません。特に工学部の先生は、そういうことを研究している人はたぶん珍しいと思うんですけども、そういう一部の限られた経験とか前例などを頼りにして模索しているにすぎないわけです。そういう中で、自分たちがやっていることの適切な評価はなかなか難しいという面があります。

それから、学生の成績評価とか取り組みの成果・評価をどう考えるべきか。これも非常に難しい問題で、私が今説明したことに対して、一体それは良かったのか悪かったのか、続けるべきなのか、やめて何か他のことをすべきなのか、その評価というのが非常に難しいと。ただ突っ走っているというのが今の現状、模索しているという状況です。

以上が、私からの報告です。

## 手探りの初年次セミナー： 工学部での取り組み

～これまでの実践と現在の課題～

青木正人

工学部 電気電子・情報工学科(応用物理コース)

## 工学部学生の初年次セミナー

### H5 ● 教養セミナー

「転換教育：高校と大学で学業の相違を認識、大学生生活、状況把握、進むべき方向を見定める」  
1クラス20人、教養部教員の専門・個性を生かした内容、助言教官

### H9 ● フレッシュマンセミナー

実施主体が工学部・6学科にうつる

### H12 ● フレッシュヤーズセミナー

工学部9学科に改組(数理デザイン工学科)

H18:「社会人基礎力」定義(経産省)

H20:「学士課程教育の構築に向けて」(中教審)


H23:「基礎的能力」定義(岐阜大学)

### H24 ● 初年次セミナー

工学部4学科・9コース制に改組

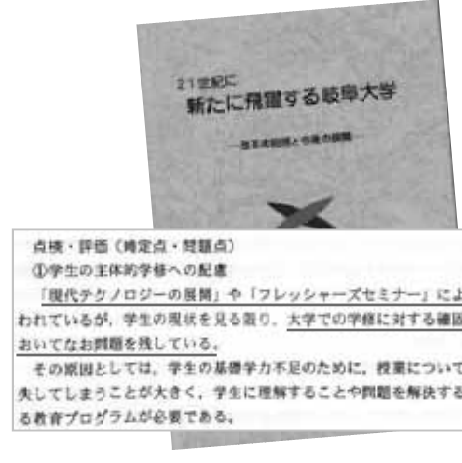
「高校での学習から学び方の転換、大学生生活、学業に必要な知識・技能、心構え」学部独自の内容

転換・導入教育  
現代テクノロジーの展開  
工学の歴史・概要・最前線  
現代テクノロジーの展開Ⅱ  
キャリア科目



工学部では学科主体型のセミナーとし、対象学生は自学部・自学科の学生に限り、名称もフレッシュマンセミナーと改められた。

「フレッシュマンセミナー」は本年度初めて実施されたもので、教官の準備にも不備な点も見られた。教官として一層の努力をしなければならない。  
学生へのアンケートなどによると、将来の各自の専門に対する興味が引き立てられ、今後の勉学意欲を喚起する一助となったものと評価してよい。



2001年

点検・評価(構定・問題点)  
①学生の主体的学修への配慮  
「現代テクノロジーの展開」や「フレッシュヤーズセミナー」によって動機付け教育が行われているが、学生の現状を見る限り、大学での学修に対する確固たる目的意識の醸成においてなお課題を残している。  
その原因としては、学生の基礎学力不足のために、授業についていけず、学修意欲が消失してしまうことが大きく、学生に理解することや問題を解決することの喜びを実感させる教育プログラムが必要である。

## 工学部学生の初年次セミナー

H5 ● 教養セミナー  
「転換教育：高校と大学で学業の相違を認識、大学生生活、状況把握、進むべき方向を見定める」  
1クラス20人、教養部教員の専門・個性を生かした内容、助言教官

H9 ● フレッシュマンセミナー  
実施主体が工学部・6学科にうつる

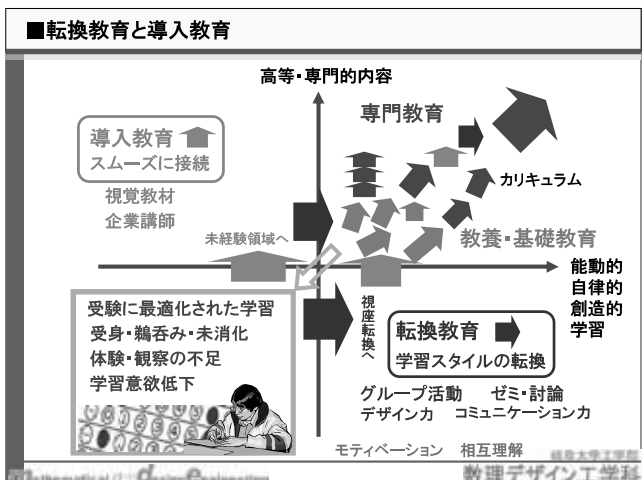
H12 ● フレッシュヤーズセミナー

H14 ● 工学部9学科に改組(数理デザイン工学科)  
現代テクノロジーの展開Ⅱ  
キャリア科目

H18:「社会人基礎力」定義(経産省)  
H20:「学士課程教育の構築に向けて」(中教審)  
H23:「基礎的能力」定義(岐阜大学)

H24 ● 初年次セミナー

H25 ● 工学部4学科・9コース制に改組  
「高校での学習から学び方の転換、大学生生活、学業に必要な知識・技能、心構え」学部独自の内容



浅川秀一:「FSプレゼンテーション」(H18年度工学部FD資料)から

### 最近の学生の特徴

- 言われたことをこなすだけ
- 論理的思考力がない
- 棒暗記
- 何が問題なのかを理解しない
- 自分の意見がない
- 話し合いができない
- 自分の意見が言えない
- 共同作業が苦手
- リーダーシップがとれない
- 孤立して仲間に入れない

### 目標・ねらい

処方箋のない作業

自分で考える

グループで作業する

コミュニケーション

### ■フレッシュャーズセミナー — 数理と計算 —

**実施組織:** 学科教員7人(プレゼン大会には全教員参加), TA2人  
**実施形態:** 演習, メールプロジェクト, グループ活動, プレゼン大会  
**受講学生:** 数理デザイン工学科1年生(40人)

#### 内容とねらい:

- ・ 情報(コンピュータ/ネット)リテラシ, 計算リテラシの導入教育
- ・ メールプロジェクト, プレゼンの企画・準備・発表などの活動を通じた, デザイン力(構想力), コミュニケーション力 獲得への内発的動機づけ

#### 特徴:

- ・ マニュアルの(通用し)ない課題 ⇒ 自分の頭を使う/チームワーク必須
- ・ 知・情・意を本気で投入できる課題 ⇒ 内発的動機付け
- ・ デザイン力・コミュニケーション力を発揮しないと達成できないタスク

#### 問題点:

- ・ 支援体制の充実
- ・ モティベーションの強化・持続 (その後のカリキュラム)
- ・ 相手校の協力(メール相手方のメリットは?)

数理デザイン工学科

浅川秀一:「FSプレゼンテーション」(H18年度工学部FD資料)から

テーマ案を考える 4月中旬  
 ・ テーマ案 (等身大)  
 ・ その動機 (問題意識)  
 メールで提出の課題 5月初旬

こんなのができる  
 テーマ  
 ユニバーサルデザインについて  
 動機  
 ユニバーサルデザインとは  
 なにか知りたから

各自のテーマ案の披露

質疑応答も含めて一人2分

5月下旬

希望テーマの投票

グループ分け (8名・7名)  
 各グループに助産教育

浅川秀一:「FSプレゼンテーション」(H18年度工学部FD資料)から

### プレゼン発表会

発表: 6分 質疑応答: 3分

#### 2006年度

- ・ ああすばらしき清しゴム生活  
朝時間通りに起床する方法
- ・ B402 (計算機演習室) のゴミ浄化計画  
大学にも制服を作った場合のメリット  
とデメリットを考える
- ・ 学生食堂の昼食時の並列緩和
- ・ No Love Pencil  
壊れにくい使いやすい文房具
- ・ Which do you like  
ブラックボード or ホワイトボード?  
ホワイトボードと黒板について
- ・ 自転車 VS バス  
登校方法 バス通学と自転車通学の比較
- ◎石封じくしない?  
校内の手洗い場における石鹸の必要性

#### 2005年度

- ・ 空き奥のセキュリティ  
エジプトの墓のセキュリティシステム
- ・ Let's 顔文字  
新しい象形文字を作ろう
- ・ おにぎりのデザイン, 湯のみのデザイン  
コンビニおにぎりのパッケージ・  
実用的な湯飲み共通性
- ・ 肉休大改造, ベンチプレスの効果  
肉休改造
- ・ 道路標識の形・色に迫る!  
道路標識のデザインのなぜ
- ◎The Best of 教室  
最も壊れにくいイスの形
- ・ 統大改造計画  
大学内の建物の配置やその与える印象

### ■フレッシュャーズセミナー 「学科長盾争奪! プレゼン大会」



二学部学生にとっての教養教育

北村 真希  
数理デザイン工学科教員TA1

「学部1年生の春, 初めて受ける大学の授業は, 私  
は家から来ていた。問題演習をやらせ, 楽をしては  
然と褒めをくれるのでなく, その道にある知  
識深さにも驚かす。この頃 知識をたたく  
のどれが実用している  
なのだが, 大学入生のために  
とって, この演習をたたく  
こそが, 大学で教育する  
べきで, 学部1年生の春  
までの学習活動を通して

教養科目の中でも, 特に印象的だったのは, 同じ  
く学部1年に受けた「フレッシュャーズセミナー」で  
行ったプレゼンテーションだ。グループ内で, 問題  
意識の共有から始まり, 議論を通じて一つの結論  
を出し, それを発表するという過程は, 知識を超えた,  
人格的な素養を必要とする。この素養は教科書から  
学べるものではない。また, 数学や物理を学んで養  
われるものでもない。エンジニアにコミュニケー  
ション・プレゼンテーション能力が問われる, 昨今  
の社会事情を踏まえても, 今後ますます教養教育の  
重要度は増すのではないだろうか。

教養教育ニュースレター  
「アンゲリア」 No.3

**フレセミ Eメールプロジェクト** 「知りたい、伝えたい英語」への要旨の読み

相手校担当者と打合せ / 参加・アドレス登録の承認  
アドレスリスト作成・確認...

FS第1回 宿題「自己紹介文(英語と日本語と両方で)」  
教員3人で英文添削(個人ごと)

FS第2回 メール決定(抽選) / 初メール送信!  
一人て世界に出て行く

FS第3回 メールプロジェクト状況調査 / 不通等への対処

1対1の実践コミュニケーション  
待ったなしの真剣勝負  
辞書と首っ引きで返信

自由なテーマで交流。  
身近な人生課題に対する  
捉え方の対比を通じて  
国際的視野を体感  
自分自身を知る

マニュアルなし!  
正解なし! 四苦八苦

最後は謝辞を送って終了 / レポート(感想)提出

ルンド大学日本語学科

数理解デザイン工学科

**工学部 数理解デザイン工学科の  
フレッシューズセミナー(H14~24)**

|  |  |  |   |
|--|--|--|---|
| <b>H14年</b><br>オリエンテーション<br>キャンパス探訪<br>コンピュータ入門1<br>コンピュータ入門2<br>インターネット活用法<br>電子メール活用法<br>POWER POINT入門<br>WORDによる文書作成入門<br>EXCELによる表計算入門<br>調査・情報収集(まとめ方の議論)<br>スライドの作成・発表練習<br>プレゼンテーション大会<br>予備日 | <b>H15年</b><br>オリエンテーション<br>コンピュータ・インターネット入門<br>コンピュータ・インターネット入門(1)<br>プレゼンテーション(準備1)<br>Excelでデータを整理・分析する(1)<br>Excelでデータを整理・分析する(2)<br>Power Pointで自己表現する(1)<br>Mapleで数値を10倍楽しむ(1)<br>Mapleで数値を10倍楽しむ(2)<br>Mapleで数値を10倍楽しむ(3)<br>プレゼンテーション(準備2)<br>予備日(プレゼン準備)<br>プレゼンテーション大会 | <b>H16年</b><br>オリエンテーション<br>コンピュータ・インターネット入門<br>インターネットを知る世界(1)<br>コンピュータ・インターネット入門<br>プレゼンテーション入門<br>プレゼンテーション(準備)<br>Excelでデータを使いこなす(1)<br>Excelでデータを使いこなす(2)<br>Mapleで数値を10倍楽しむ(1)<br>Mapleで数値を10倍楽しむ(2)<br>Mapleで数値を10倍楽しむ(3)<br>インターネットを知る世界(2)<br>プレゼンテーション(準備2)<br>予備日(プレゼン準備)<br>プレゼンテーション大会 | <b>H17年</b><br>オリエンテーション<br>コンピュータ・インターネット入門(1)<br>インターネットを知る世界(1)<br>コンピュータ・インターネット入門(2)<br>プレゼンテーション入門<br>プレゼンテーション(準備1)<br>Excelでデータを使いこなす(1)<br>Excelでデータを使いこなす(2)<br>Mapleで数値を10倍楽しむ(1)<br>Mapleで数値を10倍楽しむ(2)<br>Mapleで数値を10倍楽しむ(3)<br>インターネットを知る世界(2)<br>プレゼンテーション(準備2)<br>予備日(プレゼン準備)<br>プレゼンテーション大会 |
|--|--|--|---|

コンピュータ・情報リテラシ  
プレゼンテーション  
ルンド大学とのメールプロジェクト

情報リテラシーは他の科目へ、プレゼン・コミュニケーション・文章をじっくりと

|  |  |   |   |
|--|--|---|---|
| <b>H18年</b><br>オリエンテーション<br>メールプロシユク(1)<br>メールプロシユク(2)<br>プレゼンテーション(1)<br>コミュニケーション(1)<br>プレゼンテーション(2)<br>表計算ソフトの活用<br>数式処理システム(1)<br>数式処理システム(2)<br>プレゼンテーション(3)<br>プレゼンテーション(4)<br>プレゼンテーション(5)<br>プレゼンテーション(6)<br>発表プレゼン大会<br>予備日 | <b>H19年</b><br>オリエンテーション<br>メールプロシユク(1)<br>メールプロシユク(2)<br>プレゼンテーション(1)<br>コミュニケーション(1)<br>プレゼンテーション(2)<br>表計算ソフトの活用<br>数式処理システム(1)<br>数式処理システム(2)<br>プレゼンテーション(3)<br>プレゼンテーション(4)<br>プレゼンテーション(5)<br>プレゼンテーション(6)<br>発表プレゼン大会<br>予備日                                   | <b>H20年</b><br>オリエンテーション<br>メールプロシユク(1)<br>メールプロシユク(2)<br>安全なキャンパスライフのために<br>プレゼンテーション(1)<br>プレゼンテーション(2)<br>表計算ソフトの活用<br>数式処理システム(1)<br>数式処理システム(2)<br>プレゼンテーション(3)<br>プレゼンテーション(4)<br>プレゼンテーション(5)<br>プレゼンテーション(6)<br>プレゼンテーション(7)<br>プレゼンテーション(8)<br>発表プレゼン大会<br>予備日 | <b>H21年</b><br>オリエンテーション<br>安全なキャンパスライフのために<br>グローバルコミュニケーション(1)<br>グローバルコミュニケーション(2)<br>グローバルコミュニケーション(3)<br>グローバルコミュニケーション(4)<br>グローバルコミュニケーション(5)<br>グローバルコミュニケーション(6)<br>プレゼンテーション(7)<br>プレゼンテーション(8)<br>プレゼンテーション大会  |
| <b>H22年</b><br>オリエンテーション<br>安全なキャンパスライフのために<br>文章作法入門<br>グローバルコミュニケーション(1)<br>グローバルコミュニケーション(2)<br>グローバルコミュニケーション(3)<br>グローバルコミュニケーション(4)<br>グローバルコミュニケーション(5)<br>グローバルコミュニケーション(6)<br>プレゼンテーション(7)<br>プレゼンテーション(8)<br>プレゼンテーション大会   | <b>H23年</b><br>オリエンテーション<br>文章作法入門(1)<br>安全なキャンパスライフのために<br>文章作法入門(2)<br>プレゼンテーション(1)<br>グローバルコミュニケーション(1)<br>グローバルコミュニケーション(2)<br>グローバルコミュニケーション(3)<br>グローバルコミュニケーション(4)<br>グローバルコミュニケーション(5)<br>グローバルコミュニケーション(6)<br>プレゼンテーション(7)<br>プレゼンテーション(8)<br>発表プレゼン大会<br>予備日 | <b>H24年</b><br>オリエンテーション<br>文章作法入門(1)<br>文章作法入門(2)<br>プレゼンテーション(1)<br>論議・議論トレーニング(1)<br>論議・議論トレーニング(2)<br>プレゼンテーション(2)<br>安全なキャンパスライフのために<br>プレゼンテーション(3)<br>プレゼンテーション(4)<br>プレゼンテーション(5)<br>プレゼンテーション(6)<br>プレゼンテーション(7)<br>プレゼンテーション(8)<br>発表プレゼン大会<br>予備日            | <b>H25年</b><br>オリエンテーション<br>グループ活動の基本<br>【読者の視点】<br>情報整理術(マインドマップ)<br>【読者の視点】<br>情報の時差、種別、議題、要素<br>要約(要約)の作成<br>要約(要約)の修正、共有<br>論議的な文章作成のポイント<br>考えたとを簡単に伝える方法<br>プレゼンテーション準備<br>プレゼンテーション<br>プレゼン大会<br>準備日とこの振り返り<br>予備日 |

**課題選択で考慮していること**

- 正解のない、新入生の知識でも取り組める課題
- 体当たりで真剣に取り組まざるを得ない(ゴマカシの通用しない)課題
- 学生が、視野、考える力、構想力、コミュニケーション力など(基盤的能力)の必要性に具体的に気づくことができ、能力獲得へのモチベーションが高まり、自分の変化を感じることができる内容をもつ

**初年次セミナーの今後  
企画・担当する立場から**

- 実施主体、クラス編成は学科・コース単位でいいか
- だれが担当すべきか、目標をどこまで共有できるか
- 到達目標・授業方法・結果等、実践経験の知識をもっと共有し、体系化できないか
- 1年後期、2年次以降の科目に継承され、継続的、段階的に基盤的能力を育成する仕組みがカリキュラムに必要
- 多くの教員は、学習心理学、教育理論を研究しているわけではない。限られた経験や、前例等を頼りに模索しているが、その適切な評価が難しい。
- 学生の成績評価、取組の成果・評価をどう考えればよいか。学生による授業評価アンケートの質問項目をどう設定すればよいか

## 手探りの初年次セミナー ：工学部での取り組み

三宅 恵子（岐阜大学 非常勤講師）



【三宅】 それでは引き続き、実践を担当させていただきました三宅恵子から報告させていただきます。

「手探りの初年次セミナー：工学部での取り組み」という発表タイトルなのですが、まさに私たちは試行的にやっているところでありまして、教員4人が体当たりでやってきたという状況です。今日は、その辺りの実際について、皆さんにお話ししたいと思います。まだ1年目の取り組みでして、蓄積という点では至らないところがあるかとは思いますが、参考にしていただけたらと思います。

まず、私がこのセミナーに加わるに当たって、2月ごろ、青木先生から招集がかかりました。担当する4人の教員が集められて、今までの経緯を踏まえてどういう方向を目指すかについて、3、4回ほどがっちり議論をしました。そこでは、教員側からの学生に対する要求と、入学してくる学生の気持ちという、その両面に分けて議論し、その上で、この授業において重点を置くポイントを整理しました。

そこで、次に示すいくつかの点が挙がりました。まず、グループ活動を中心にやっていこうということになりました。このグループ活動とは、クラス全体は23人からなりますが、4人1組のチームで行うものです。学生生活を送る上で、留年や落ちこぼれていく学生を学生同士のネットワークで支えるような学友との関係作りが大事だろうと考え、そこで、グループ活動を通してそういう関係性が作れないかということで、グループ活動を取入れることにしました。

それから、レポートや文章を書けていないという指摘が教員からありましたので、論理的思考トレーニングを取入れ、そのための基礎的スキルの習得をメニューの中に織り交ぜていこうということになりました。

それから、「受動的学習から能動的学びへ」ということで、高校までの受け身の勉強スタイルから能動的な学習スタイルへ転換したい、そこに気付かせたい、というのがありまして、この点についても、重点を置きました。

また、全体を通して、学生の気付きを促す働き掛けをしていこうとなりました。知識を教えて、「こういうふうにするのですよ」ということを伝えるのは割と、効率的にできるのですが、そうではなくて、まずはやってみて、失敗から気付くとか失敗から学ぶというところに重点を置きました。

そして、私たち教員4人の裏テーマとしては、「うのみからの脱却」というのを根底に置いて、学生達にはそういうところは見えないようになっているのですが、そこを目指してやってきました。

実際の授業展開としましては、与えられたテーマの中から学生がそれを選択して、それについて調査して得た事実に基づいて論証を行うという形式をとりました。

提示したテーマというのは、ここに出されているものです。例えば、「大学は秋入学を導入すべきである」「小学生の集団登下校をやめるべきである」ですとか、「日本はサマータイム制を導入すべきである」というようなテーマについて、是か非かを選び、その過程で得た事実に基づいて自分たちの主張を守り通すようなやり方で、論理的な思考のトレーニングを行いました。これ以外にも、テーマを自分たちで設定してもよいとしました。学生たちは、下線を引いたテーマを選びまして、これらのテーマを各チームが抱えながら13回やっていくという形で進めてきました。

「学生の活動と実際」なのですが、実際にはなかなかうまくいかなかったというのが正直なところです。

まず、グループ活動の基本として、「グループ活動に必要なことって何だろう」という問いかけをして、学生達と議論して、心構えや役割分担というところを意識させるようにしました。このように最初にグループ活動の下ならしをしまして、そこからテーマを選択させて、チームで是か非かを議論させました。この時に、ワークシートを使って、あらかじめ自分がどっちの立場なのか、その理由を考えさせてきて、それを持ち寄って議論するというスタイルをとりました。

その後、ある程度是か非かを決め、根拠となる資料を集めてきて、論理の組み立てを2回ほどやりました。ここでもワークシートを用意しまして、できるだけやりやすいように工夫しました。

それを終えた後に、発表を2回行いました。発表の後には、教員との質疑応答を行い、教員からのコメントをアドバイスシートにまとめ、AIMSでフィードバックしました。

このやりとりを通して、教員のコメントをもとに再構築するステップを経て、次に、ある程度、論理展開が固まったところで、文章課題として発表の要旨を書く作業をしました。さらには、プレゼン審査の評価基準を公表しまして、プレゼンのアウトライン固め、プレゼンづくり、それから、プレゼン大会、そこでの質疑応答と進めてきました。

最後に、全体の振り返りを行いました。昨年度までは、振り返りを行わなかったため、プレゼンが終わって「わあ、終わった、終わった」となってしまったそうなので、今回は自己チェックを取り入れ、しっかりと振り返りを行いました。

この間、私も初めて初年次生を担当したこともあり、驚くことがいろいろありました。まず、「根拠となる資料を持ってきなさい」と言うと、学生達の情報源はWikipediaか知恵袋なのですね。「それは違うだろう」と思うわけですが、そこにずっと頼り続けているのです。それから、「情報はどこにあるの?」と言うと、必ずスマートフォンを出して、「ここです」と言うのです。「そうじゃなくて、原典となる資料を持ってきてそこからやろうよ」となるのです。やりとりを重ねていくうちに、そういうところから教えないといけないのかなということに気づき、驚かされました。

あとは、発表の流れをつくっていく中で、教員との質疑応答を行いますと、教員からの突っ込みに学生はうまく対応できず、逃げ出したり、やきもき、モヤモヤしたりするわけです。教員側としても、課題の意図が学生に伝わらないというところで、教員自体もモヤモヤしたのを感じながら進んできました。途中で、我々も折れそうになりながら、プレゼン大会は中止した方がいいんじゃないかというようなことも話し合いました。しかし、やはり「場の設定は重要」ということで、やり切る場を提供しないと結局うやむやになってしまうだろうという意見もありまして、当初の予定どおりプレゼン大会を行いました。

ちょうど中盤あたりで、最初に「グループ活動の役割を意識していこうね」と言った割には、

役割が固定化してしまい、到達目標がなかなか見えないという状況に陥ってしまいました。そこで、その回以降は、毎回、具体的な目標を提示するように転換していきました。そしてプレゼン大会を終え、自己チェックによる振り返りを行いました。ここでまた見えてきたことについて、お話ししたいと思います。

授業を通じて見えてきたこととして、「グループの変化」と「自己チェックで見えてきた学生の『気づき』」というものがありました。

1つ例を挙げますと、グループAというのは、「大学生はアルバイトをすべきか否か」をテーマに選んだのですが、具体的なデータや資料集めが不十分で、何遍言ってもスマートフォンを出してきて、「これです」と言うような状態でした。また、言葉の定義や解釈が非常に曖昧なままに議論をしますので、教員からの質疑応答でもなかなか受け答えができなかったのです。そこで、教員からのコメントをAIMSで送りまして、修正を促してきました。

右に示しましたのが、実際に教員から学生に送ったアドバイスシートです。課題分析はできているか、論理性はどうかというところを評価しまして、それぞれの発表した内容について個別に質問やコメントをしました。

そして、このグループは、最終的には教員からのコメントを盛り込みまして、プレゼンでは具体的なデータや補足を行って、論理的に話を展開することができました。プレゼン大会が終わった翌週に、学生達に「どうでした？」と感想を聞いた時、このグループのメンバーから「思ったよりうまく説明できてうれしかった！」というコメントが返ってきました。このグループでは、途中、モヤモヤの時期もあったのですが、自分たちで乗り越えることができたという、達成感があったのかなと思いました。

他のグループはどうだったかといいますと、テーマを咀嚼（そしゃく）して絞り込むことで、自分たちの主張を組み立てられたグループもありました。例えば、「大学は秋入学をすべきである」というかなり大きなテーマを選んだグループは、結論をどちらにしよう、どうしようとギリギリまで粘りながら、悩みながら、最終的には、「岐阜大学に秋入学を導入すべきか否か」とテーマを絞り込みました。そうすることで、調べてきた資料を活かして論理展開を修正できました。ここでも学生が自ら気付いて、テーマを絞り込むことができたのでした。

また、テーマが難しいと判断して、変更したグループもありました。実際には、テーマ変更した後の課題分析の時間が足りなくて、最後のプレゼンではあまりうまく発表ができなかったのですが、このグループも自分たちで判断して、自分たちでテーマを変えたところがあるかと思えます。

一方で、一方的な視点から抜け出せないグループというのがありまして、「アルバイトはしたいからするんだ」というふうに、ずっとそれで押し通そうとするわけです。だんだん、その場を耐えてやり過ごそうとするような面もチラチラと見えて、こういうグループは改善することがなかなか難しかったです。

また、どうしたらいいか、答えを教えて欲しいがるグループというのがありまして、教員の意向に寄り添おうとし過ぎて、自分たちの主張がなかなか出てこないところがありました。

学生の振り返りは、基盤的能力の9つをそれぞれ自己評価するやり方で行いました。まずは個人で到達状況を点数で評価し、レーダーで可視化して、その後に学生同士でその結果を見せ合いました。学生によっては、自己評価がとても低い学生がいるのですが、それを同じチームの学生

が、「そんなことはないよ。こんなところができていたよ」というふうに他者から評価されることで、改めて自分を理解するということがあったかと思えます。このように、他者からの評価と自己評価のギャップを知ることで、自己理解を促すことができたのではないかと思います。

さらには、9つの項目について、自分ができた点や、できなかった点を具体的に書かせた上で、できなかったところについて今後どのように行動するかを具体的に書かせました。すると、私たち教員から見て、この学生はこの項目がまだはちょっとできていないなと感じるところを、学生自身が気づいていて、それを自分で書いてくるのです。学生の気付きは、普段接していてもなかなか見えにくいのですが、こういう形で書いて具体的に自己評価させることによって、苦手な部分をどのあたりまで学生が認識しているのかを、教員が個別に確認できるのではないかと思います。

授業のアンケートの結果ですが、授業内容については、「分かりやすかった」「難しかった」の評価で意見が分かれました。この結果が、課題の意図が伝わった学生とそうでなかった学生の違いなのか、それともグループの属性による違いなのかについては、今後、分析する必要があるかと思えます。

また、私たちが一番苦慮しましたテーマ設定について「現在のままの選ぶやり方がよい」という学生と、「自分たちでテーマを設定したい」という学生に分かれました。テーマ設定は、活動の動機付けとなるため、さらに検討が必要と思っています。

以上をまとめますと、今回のセミナーを通じて、学生は自分たちの言いたいことが伝わらない状況を初めて経験したのではないかと思います。この背景として、高校までは調べもの学習はあっても、調べた事柄から論理を立てて主張する経験は少なく、また発表の機会も少ないことがあるのではないかと思います。そのため、学生にとっては、今回のような論理的思考トレーニングを受けるのは、ほぼ初めての経験だったのではないかと思います。

改善のポイントとしては、1つ目に「到達目標の設定（どこに設定するのか?）」です。学生のレベルには、ばらつきがありますので、その中でどこに設定したらいいのかということです。それから、「テーマ設定」です。あとは、1つずつスキルを積み上げていかないと、すぐ崩れてしまうので、具体的な例をもとに分かりやすく伝えていく必要があるかと思えます。

また、「どこに重点を置くのか」ということも重要と思えます。実は、授業時間を大幅に延長した回もありまして、学生からはかなり不評でした。時間的な制約がある中で、テーマづくりから論証までの全てを習得させることは困難ですので、どこに重点を置くのかということをもう少し絞ったほうがよいと思えます。あとは、「学生の気付きや学びをどう把握して評価していくか」ということになるかと思えます。

以上のように、体当たりでやってきたのですが、依然として教員4人の中には、「カリキュラム全体を通しての初年次セミナーの位置付けとは何だろう？ 初年次セミナーの学びはどこへつながるのか？ そして、その学びをどうやってつなげていくのか？」という課題が横たわっています。この辺りを明確にして、それを学生と共有して取り組めれば、初年次セミナーはもっとよいものになっていくのではないかと思います。

以上です。



## 手探りの初年次セミナー： 工学部での取り組み

三宅 恵子  
岐阜大学 非常勤講師

教員4人  
体当たりの

## 手探りの初年次セミナー： 工学部での取り組み

三宅 恵子  
岐阜大学 非常勤講師

### 授業において重点をおいたこと

- グループ活動(4人1組のチーム:全体では23人)  
→学友との関係性の構築
- 論理的思考トレーニング  
→レポートや文章を書く上での基礎的スキルの習得
- 受動的学習から能動的学習へ  
→高校までの受け身の勉強スタイルから能動的学習スタイルへの転換
- 学生の気づきを促す働きかけ  
→まずはやってみて、失敗から気づく、学ぶ
- 裏テーマは「うのみからの脱却」

具体的には、与えられたテーマの中から学生が選択し、それについて調査して得た事実に基づいて論証を行う形式

### 提示したテーマ

- ・大学は秋入学を導入するべきである
- ・大学での成績も相対評価であるべきである
- ・英語の授業は英語を母国語とする外国人が教えるべきである
- ・日本では小学校から英語教育をすべきである
- ・小学生の集団登下校をやめるべきである
- ・すべての公共の場に防犯カメラを設置すべきである
- ・すべての現金決済を禁止すべきである
- ・天気予報は結果に何らかの責任を負うべきである
- ・日本はサマータイム制を導入すべきである
- ・学校は完全週休2日制を廃止すべきである
- ・大学生はアルバイトをすべきである
- ・高校の制服は廃止すべきである
- ・救急車は有料にすべきである
- ・日本は飲食店にドギーバッグ(持ち帰り用容器)の常備を義務づけるべきである

テーマは、上記から選択するか、または自分たちで考えてもよいとした。

### 学生の活動と実際

- グループ活動の基本(心構えと役割分担)
- テーマを選択
- 是非かをチームで議論(ワークシート)
- 根拠となる資料を集める
- 論理の組み立て2回(ワークシート)
- 発表(1回目)
- 教員との質疑応答(コメントをAIMSでフィードバック)
- 発表(2回目)、教員のコメントをもとに再構築
- 教員との質疑応答(コメントをAIMSでフィードバック)
- 文章課題(発表の要旨を書く)
- プレゼン審査基準の公開、プレゼンのアウトライン固め、プレゼンづくり
- プレゼン大会(学科教員による審査)
- 質疑応答
- 活動のふりかえり
- 基盤的能力自己チェック・授業アンケート

情報源はウィキペディアか知恵袋  
情報はスマートフォンに。

教員からの突っ込みにうまく  
対応できずモヤモヤ。  
教員側も課題の意図が学生  
に伝わらずモヤモヤ。  
プレゼン大会中止も検討。  
より具体的な目標を提示。

場の設定の重要性。  
やりきる場の提供。

自己チェックによる振り返り  
の重要性。

### 授業を通じてみえてきたもの

- 1) グループの変化
- 2) 自己チェックで見えてきた学生の「気づき」

## グループA

- テーマ「大学生はアルバイトをすべきか否か」
- 具体的なデータや資料集めが不十分。
- 言葉の定義や解釈があいまい。



- 教員からのコメントを盛り込み、プレゼンでは具体的なデータや補足を行い、論理的に話を展開することができた。

「思ったよりうまく説明できてうれしかった！」

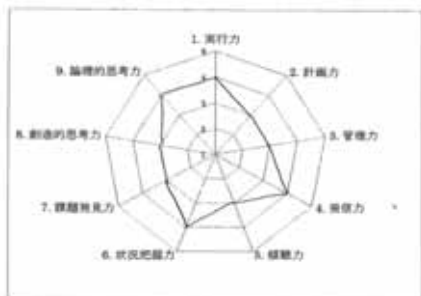
6

## 主張を組み立てる過程でのグループの反応

- テーマを咀嚼して自分たちの主張を組み立てられたグループ  
例：「大学は秋入学をすべきである」から「岐阜大学に秋入学を導入すべきか否か」へテーマから絞り込むことで論理展開を修正できた
- テーマが難しいと判断し、変更したグループ  
例：具体的なデータがある「救急車は有料にすべき」に変更
- 一方的な視点から抜け出せないグループ  
例：「アルバイトはしたいからしたい」その場を耐えてやり過ごそうとする面も。
- どうしたらよいか「答え」を教えて欲しいがるグループ  
教員の意向に沿おうとしすぎて、自分たちの主張が出てこない。

7

## 活動のふりかえり 基盤的能力(岐阜大学)の自己チェック



到達状況を可視化。学生同士で結果を見せあい、他者からの評価と自己評価のギャップを知ることで、自己理解を促す。

8

## 学生によるふりかえり

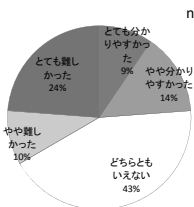
| 活動内容      | 振り返り                       | 気づき              | 今後の活動              | 感想                 |
|-----------|----------------------------|------------------|--------------------|--------------------|
| 1. 自己紹介   | 自己紹介の準備ができていなかった。緊張していた。   | 緊張していた。緊張を克服できた。 | 緊張を克服できた。緊張を克服できた。 | 緊張を克服できた。緊張を克服できた。 |
| 2. グループ活動 | グループ活動の準備ができていなかった。緊張していた。 | 緊張していた。緊張を克服できた。 | 緊張を克服できた。緊張を克服できた。 | 緊張を克服できた。緊張を克服できた。 |
| 3. 発表     | 発表の準備ができていなかった。緊張していた。     | 緊張していた。緊張を克服できた。 | 緊張を克服できた。緊張を克服できた。 | 緊張を克服できた。緊張を克服できた。 |
| 4. 振り返り   | 振り返りの準備ができていなかった。緊張していた。   | 緊張していた。緊張を克服できた。 | 緊張を克服できた。緊張を克服できた。 | 緊張を克服できた。緊張を克服できた。 |
| 5. 発表     | 発表の準備ができていなかった。緊張していた。     | 緊張していた。緊張を克服できた。 | 緊張を克服できた。緊張を克服できた。 | 緊張を克服できた。緊張を克服できた。 |
| 6. 振り返り   | 振り返りの準備ができていなかった。緊張していた。   | 緊張していた。緊張を克服できた。 | 緊張を克服できた。緊張を克服できた。 | 緊張を克服できた。緊張を克服できた。 |
| 7. 発表     | 発表の準備ができていなかった。緊張していた。     | 緊張していた。緊張を克服できた。 | 緊張を克服できた。緊張を克服できた。 | 緊張を克服できた。緊張を克服できた。 |
| 8. 振り返り   | 振り返りの準備ができていなかった。緊張していた。   | 緊張していた。緊張を克服できた。 | 緊張を克服できた。緊張を克服できた。 | 緊張を克服できた。緊張を克服できた。 |
| 9. 発表     | 発表の準備ができていなかった。緊張していた。     | 緊張していた。緊張を克服できた。 | 緊張を克服できた。緊張を克服できた。 | 緊張を克服できた。緊張を克服できた。 |
| 10. 振り返り  | 振り返りの準備ができていなかった。緊張していた。   | 緊張していた。緊張を克服できた。 | 緊張を克服できた。緊張を克服できた。 | 緊張を克服できた。緊張を克服できた。 |

学生の気づきは見えにくい。自己評価で個別に確認。

9

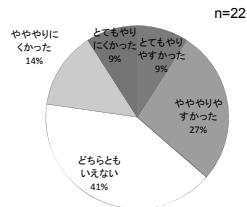
## 授業アンケートの結果

問2: 授業内容 n=22



評価は分かれた。  
一課題の意図が伝わった学生とそうでなかった学生の違い？  
グループの属性を分析する必要あり。

問3: グループ活動 n=22

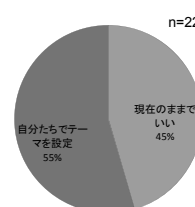


コメント(抜粋)  
◎とてもやりやすかった、やややりやすかった  
\*自分個人ではできないことも多いから  
\*一人でやるより何人かのほうが意見を話し合えたりして良かったから。  
◎どちらともいえない  
\*仲良くなれたが、チームで分担が難しかった。  
\*予定が合わなかったりして大変だった。  
◎やややりやすかった  
\*意見をまとめるのが難しかった。  
\*伝えるのが難しかった。

10

## テーマの設定方法

問4: テーマ設定方法 n=22



コメントの抜粋:

- ◎現在のままでいい
  - ・自分で選ぶと安易な方向に走ってしまうから。
  - ・自分たちが主となるテーマだと議論が深まらないので。
  - ・自分たちで決めようとするのは、それはそれで難しそう。
  - ・深いところまで考える必要があり、力がつきそう。
  - ・内容を考えるだけで、楽でよかったが、テーマごとにばらつきがあった。
- ◎自分たちでテーマを設定したい
  - ・与えられたテーマは考えにくいものが多かった。
  - ・テーマを考えない分今回は楽であったが、議論をするのが難しかった。
  - ・そのほうが生徒側のストレスが減ると思う。
  - ・そのほうが権限を見つけやすい。
  - ・自分たちが考えたことなので取り組みやすい。
  - ・自分たちで1から決めていったほうがやる気が出ると思います。

活動の動機付けとなるテーマ設定については、さらに検討が必要

11

## まとめ

今回のセミナーを通して、学生は自分たちの言いたいことが伝わらない状況を初めて経験。

背景：高校までは調べもの学習。調べた事柄から論理を組立て、主張する経験は少ない。また、発表や質疑応答の機会も少ない。

★論理的思考トレーニングは学生にとっては、ほぼ初めての経験。

改善のポイント：

- 1) 到達目標の設定(どこに設定するか?)
- 2) テーマ設定(動機付け、難易度の調整)
- 3) 具体的な例をもとに、1つずつスキルを積み上げていく。
- 4) どこに重点をおくか? 時間的な配分も重要。  
テーマ作りから論証までの全てを習得させることは困難
- 5) 学生の気づきや学びをどう把握し、評価していくか?

12

## 体当たりでやってきたものの、、、。

### 横たわる課題

- ・カリキュラム全体を通しての初年次セミナーの位置づけとは?
- ・初年次セミナーの学びはどこへつながるのか?
- ・初年次セミナーの学びをどうやってつなげていくのか?

13

### 講演 3

## 応用生物科学部における初年次教育の進展



早川 享志（応用生物科学部 教授）

【早川】 それでは、応用生物科学部、早川と申します。私のほうから、「応用生物科学部における初年次セミナーの進展」ということで話をさせていただきます。

まず、応用生物科学部における初年次セミナーはいつから始まったかということを見ると、これは元は全教のところからスタートしているんですけども、そういったところからちょっと話を進めさせていただきます。そして、どのような内容が最初行われてきたのか？ そして、どのような内容が加えられてきたのか？ そして、昨年ちょっと見直しをしたんですけども、今年度に対してはどのような検討が加えられたのか？ そして、今後はどのような取り組みが必要なのか？ そういったことのお話をさせていただきます。

どういう経緯でスタートしたのかですけども、実は、教養セミナーというのは 1987 年にもうスタートしているんです、岐阜大学では。このときには、少人数教育を軸とした一般教育改革ということで、ここに 4 つ挙げた教養セミナー 1 単位必修化と、それから 2 番目、一般教育科目の弾力化。3 番目、総合科目の開設。4 番目、日本語科目、日本事情に関する科目の開設という中の 1 つです。

その中を見てもみますと、一般教育科目の区分とは別に、教養セミナー 1 単位必修化の区分が設けられて、一般教育科目の修得（※資料より）単位は 37 単位に変更されたと。そして、1 セミナーは約 20 名で、50 セミナーの開設で、原則として教養部全教官（※資料より）が参加というのが、当初のスタートしたときの教養セミナーということになります。

その後若干の変更がなされ、1993 年には、教養セミナー担当教官（※資料より）、これは助言教官という形で改革が継承されていくわけですけども、じゃあ応用生物科学部においてはこういうふうになっているかということですけども、このときまだ、1987 年の冊子で「学生生活」というものがあります。これを見ますと、「大学における生活や学習は、高等学校と基本的に違っており、多くの学生がそのために戸惑っているようである。教養セミナーは、教官一人当たり約 20 名の学生によって開講し、教官それぞれの専門や個性をいかした指導によって、大学に入学したばかりの学生が大学生活に慣れ、自らの置かれた状況を正確に把握し、進むべき方向を見定める能力を養うことを目的としている」ということで、教員の名前が付いて〇〇セミナーという形で、49 人の教官が前期 35 コマ、後期 29 コマということを担当していたというのが、教養部時代のものです。

ところが、1996 年 9 月 30 日に、教養部の廃止ということがありました。それと同時に、地域科学部が設置されたわけです。実は、このときから全学共通教育は全学体制ということになりました。教養セミナーについては、基本的には学部教員が担当しての開講ということになります。

そのときの単位ですけども、左側が 1996 年ですから、学部に移行する前だと思います。教養セミナーは全体の中で 2 単位。それから、こちらは学部に移行してからのことになりますけれど

も、教養セミナーは同じく2単位ということで、他の科目の中の位置付けは若干変わっておりますけれども、教養セミナーについてはそのまま学部も旧来のものを持っている形になっています。内容的にも、当初はやはり、高校生から入学した学生への学習支援という、そういったことで話を受けました。

うちの学部は、前は農学部でしたので「農学部教員担当のセミナー一覧」を見てみました。どういう形でスタートしたかといいますと、4つの学科がございまして、それぞれ3名が出て分担をしているわけです。このときに、それぞれどういう科目をやっているかという、百町セミナー「生物界の混沌と秩序（講義）」、大場セミナーも講義と実習。それから、岩澤セミナーは講義。笹野セミナーは講義。三輪セミナーは、講義を含めた対話形式の形。柳田セミナーも輪読形式。

それから、鈴木セミナーは「インターネットと生物学」、講義と演習です。私のセミナーは、「食をテーマとした自活支援セミナー」ということで、講義あるいは調査、そして体験、そういったことを含めたことを計画しました。それから、重松セミナーは実験です。化学実験をやって発表させる。

それから、獣医のほうでは、鈴木セミナーが、学内探訪して、地域社会の見学をして、SCSを通じた交流ですね、インターネットを通じた交流、それから総合討論、こういったことを計画して、平井先生は講義。そして、工藤セミナーは科学論文読解、学内外の探訪と体験、総合討論。

非常に多岐にわたっているのが、これで分かると思います。つまり、それぞれの教員の立場で、自分がこういうふうになればいいだろうということを考えて始まったというのがスタートです。つまり、中身については各教員に委ねられていたわけです。

これは私のシラバスですけれども、当時のシラバスを見ると、今改めて気付いたのが、「農学部優先」。基本的には、農学部のために開講しているんですけれども、「教育学部も可」ということになっていました。これがどういうことかは、私はよく分かりませんが、恐らく教養からかなり先生方が来られたということもあって、そういったことでその分貢献をする必要があるのかなという、今はそういう見方しかできないんですけれども、他の学部の学生さんも受け入れていたという状況があります。

私の中でどういうふうにとスタートしたかといいますと、全15回のこのときのシラバスですけれども、全体の説明をして自己紹介をさせる。「参加者相互の交流、テーマの設定」。これも当時は4人のグループを作って、そして時にはそのテーマに関してグループ討論みたいな形をさせて、意見交換会というのをやりました。それから、われわれのことも知ってほしいので、われわれがどういうふうにして今この姿があるのかということも学生に知ってもらおうということで、お互いに自己紹介をしながら、学生も教員も相互で知り合うという機会をここで持っています。

そして、こちらの「“食”をテーマとして」というのは私が話を、通常の講義をしているわけです。「“おみやげ”の効能」というのは、連休明けにお土産を各グループに買ってこさせて、なぜそのお土産を選んだのかというのを討論させて、そのお土産を選ぶ基準は何かとかそういったことです。結局は、学生相互のコミュニケーションを高めるということを目指したことをやりました。

そして、「食と科学」「食と情報」をテーマにした話をして、ここで「図書館で情報を探す」ということは、今でいう、今は図書館ツアーをやっていますけれども、私としてはこのときに、

図書館があって、どういうふうに使ったらいいのかということを知りたいと思って始めました。ですから、ちょっとしたこういったことが、図書館ツアーの元になっているのかなと、今では思っています。

そして、与えられたテーマを調べて、そういった結果を報告するというのもしています。こういったテーマを自分で考えるか。そして、その結果、こういったことを考えたか、まとめたかということ短くプレゼンして、これも自己紹介の一端として、お互いにどういう人がいて、何を考えているのかを共有するための場として設けています。

それから、「コンピューターによる生活支援」「コンピューターによる情報支援」というのは、当時は農学部には22番教室という情報処理のミニ版がありましたので、そういった教室を使って、インターネットとか、それから情報の調べ方ということを学習させていました。

こういう形で、最初はスタートしたわけです。

次に、どのようにこういった今の内容が加えられてきたのかというと、実は、図書館ツアーについては、今話したように、私が最初スタートしたときに始まったのかなと自分では思っているんですけども、その後、先生方が個々に図書館に交渉して、どうもやられていたようです。記録的には、平成18年に応生の学部の複数の教員から直接依頼によって図書館ツアーを実施したというメールの記録があったという情報を頂いたので、ここに載せさせていただきました。正確には、応生として始まったのは、江口学務係長から依頼したという記録がメールにありましたので、恐らく平成19年からこういう図書館ツアーというものが、学部のオフィシャル行事として入ったんだろうと思われま。

それから、講演会ですけども、私たちの学部では担当の教員がやるだけではなくて、全体でまとめて講演会というのも設けています。つまり、学生にとってこういった教育が必要であろうということで、1つは「学生支援と学生ラウンジ」、それからもう1つが「大学生に期待すること～災害救援NPOの現場から」、これが最初スタートしたんですけども、その後いろいろ、学生のメンタルの問題も出てきましたので、「大学生のメンタルヘルス」の話を、保健管理センターの田中生雅（みか）先生にさせていただくということが入ってきました。

それ以外に「キャンパスガイドの読み合わせ」という、これも学生が生活をスタートする上において、キャンパスガイドの内容を周知したほうがいいであろうということで、その場をこの教養セミナーで行ってきています。これは恐らく、平成21年ごろから入ってきたと思います。

次に、最近ですけど、平成20年に私が担当したときのシラバスですけども、ここにはそういった情報が、実は入っていません。どうして入っていないかというと、分からなかったわけです。最近になって、急にいろんな講演が入ってきたので。

同じ年の、これは実際に学生に配った、周知させたシラバスです。この中には、やはり学部共通のものとしてキャンパスガイド、それから講演が3つ。そして、図書館ツアーが入っています。それ以外のものは先ほどの、昔、当初やったことと同じように自己紹介をやって、あと私がプレゼンをして。そして、ミニプレゼンテーションというのは、食品に関わる話に限定をして、自分で興味があることを調べてプレゼンテーションしなさいということをやりました。これによって、学生相互の理解、こういった子がいるか、こういったことを考えているかということをお互いに周知する重要な機会じゃないかということでスタートしたわけです。

去年、今年の初年次セミナーを始めるに当たって、ワーキングというものを作って、改善案を

考えました。当初、入学してきた学生は、真面目で非常に向学心に燃えた感じがあるという印象なんですけれども、そのうちだんだんと目が濁ってくる。何となく、生き生きとした感じがなくなってしまう。これはどうしてなんだろう。そういったことを相談したわけです。

そうすると、学年の進行に伴って、どうもだんだん元気がなくなるなどというのをどうして防いだらいいかということに関しては、これを防止するための手段として、教員の失敗談とか研究の楽しさなどを、各課程代表の教員、この教員もどういう教員にするかということがいろいろ議論があったんですけれども、うちの学部ではよそに出前講義に行っている先生、授業評価の比較的高い先生が出前講義に行っています。そういった先生方の力を得て、研究の楽しさ、それから教員の失敗談とかそういったものを熱く語ってもらうことによって、学生の興味を専門のほうにも向けてもらって、その興味を維持できないかということを目指して新しく入れたのがこの3つです。ここにある第4週から第6週のところに、「応用生物科学部各課程教員の研究談義」とありますけれども、こういったものが新たに加わってきました。

これが具体的な内容ですけれども、先ほどの青の共通的なものですね。キャンパスガイド2013の読み合わせも青にすべきですかね。これは青ですね。それ以外に、赤が加わってきました。つまり、各課程から2名の先生をお願いして、必ずしも同じ先生が全てのクラスに当たるわけではないんですけれども、複数の中から、それぞれ課程が違う3名の先生が当たって、各クラスに研究談義をするという機会を持ったわけです。その後、私が通常の授業をして、私の場合は食品関係を中心とした話をして、やはり食品に関する興味、こういったことを自分でテーマ設定をして、じゃあなぜそれを選んだか。その結果、どういうふう調べていくか、発表するかということの評価の対象にするぞということで、ミニプレゼンテーションを加えています。

自己認識の場として私は考えていましたので、こういうふう当初から受講生のプロフィールというものを作って、これはA4サイズの表紙ですけれども、この中身としては6つですね、1人6分の1のスペースを与えて、名前とか、それから私は食べ物が中心でしたので、好きな食べ物、嫌いな食べ物とか、それから大学に入ってから活動ですね。どういうクラブに入ろうとしているのかとか、そういったことを聞いたりとか、下宿ですか、自宅ですかとかそういったことを聞いて、その後のいろんな質問をするときのネタにもなりますので、こういった資料を最初作って、これを配布した上で授業をやって、最後に学生のプレゼンテーションをしてもらうということをしてもらっています。

これは意外に、相互理解には役に立つようです。最終的には使わないみたいですが、最初はどんな子がいるんだろうとかそういったことに、非常に役に立っているようです。

こういう研究談義に関しては、どういうふうに学生は思っているかということ、実は非常に面白かったと、興味が持てたということで、今回導入して非常に良かったなというのが、今年に導入した印象です。

それから、今後の問題としては、先ほどの他の学部、工学部さん、あるいは三重大さんでも、日本語文章の能力とかの問題がありましたね。日本語能力の涵養（かんよう）という問題がありましたけれども、なかなか今の時間を見ると、入れるのが非常にタイトです。実は、教育学部の山田先生も最初ワーキングに加わっていただいて、お手伝いはできますよという提案は頂いていましたけれども、今回の時間の中で、各教員のプレゼンまで入れてこちらも入れるということは非常に困難でしたので、今年は教員のプレゼンを加えるという形で進めさせていただきました。

ただ、われわれは日本語能力の涵養について必要性は感じていますので、今後どういうふう to それをやっていくかというのが問題になるかと思ひます。

それから、現在は担当教員、うちの課程は輪番です。最初の年、平成9年に担当した3名がどういふふう to 決まったかといひますと、実は、「浦島太郎」担当教員です。つまり、3人とも留学をしてきて帰ってきたら、「来年からこういうのがあるから、あんたたち、これをやりなさい」と言われ担当したといふ状況があります。ですから、とにかく最初は教員にお任せでスタートしています。他の学部、学科、課程では、ある程度継続して最近は担当があるようですけれども、それもまだ確定しているわけではありませぬから、継続的な担当をどうするかといふ問題はあるかなと思ひます。

それから、討論形式による意思伝達能力とか自己表現力の涵養の場として、プレゼンテーションとかあるいはグループ討論といふのは非常に重要だと思ひますけれども、こういったものは各先生方の判断に任されていひ、まだその学部では統一的にどういふふう to したらいいかといふことが議論できていませぬ。

現状ではいろんなメニューが入ってきていますので、いろんなことをやろうと思ひても、ちょっと時間不足なところがあります。ですから、ひょっとすると、各課程の演習とかそういったところでやるべきなのか、そういったこともやはり今後検討していく必要があるかなと思ひておひます。

以上、私の学部のこれまでの流れについてお話しさせていただきました。ご清聴ありがとうございます。



## 応用生物科学部における 初年次セミナーの進展

応用生物科学部 応用生命科学課程  
食品生命科学コース

早川 享志

## 応用生物科学部における初年次セミナー

1. いつ、どのような経緯でスタートしたのか？
2. どのような内容が行われてきたのか？
3. どのように内容が加えられてきたのか？
4. 平成25年度に対してはどのような検討が加えられたのか？
5. 今後はどのような取り組みが必要なのか？

1. いつ、どのような経緯でスタートしたのか？

## 岐阜大学教養部における教養セミナー

岐阜大学教養部カリキュラム改革  
1987年度（昭和62年度）の改革  
（少人数教育を軸とした一般教育改革）

### ① 教養セミナー1単位必修化

一般教育科目（人文・社会・自然）の区分とは別に、教養セミナー（1単位必修化）の区分が設けられ、一般教育科目の修得単位は37単位に変更。1セミナー約20名、約50セミナー開設（原則として教養部全教官参加）。

この改革は、教養セミナー担当教官＝助言教官として1993年の改革に継承されていく。

- ② 一般教育科目の弾力化
- ③ 総合科目の開設
- ④ 日本語科目、日本事情に関する科目の開設

1. いつ、どのような経緯でスタートしたのか？

## 岐阜大学教養部における教養セミナー

冊子「学生生活」（1987）より

大学における生活や学習は、高等学校と基本的に違っており、多くの学生がそのために戸惑っているようである。教養セミナーは、教官一人当たり約20名の学生によって開講し、教官それぞれの専門や個性をいかした指導によって、大学に入学したばかりの学生が**大学生生活に慣れ、自らの置かれた状況を正確に把握し、進むべき方向を見定める能力を養う**ことを目的としている。

〇〇セミナー（49教官）  
前期35コマ、後期29コマ開講（約20名/コマ）

1. いつ、どのような経緯でスタートしたのか？

## 教養部の廃止（1996年9月30日） 地域科学部の設置（同年10月1日）



全校共通教育は、全校体制へ

教養セミナーについては、基本的に学部教員が担当して開講となった。

教養科目（1996年、平成8年）

| 区分科目     | 単位数 |
|----------|-----|
| 教養セミナー   | 2   |
| テーマ科目群   | 6   |
| 個別科目     | 12  |
| 総合科目     |     |
| 身体活動科学演習 | 3   |
| 外国語演習    | 10  |
| 計        | 33  |

\* 生物資源利用学科と獣医学科の場合

教養科目（1997年、平成9年）\*

| 区分科目                          | 単位数             |
|-------------------------------|-----------------|
| 教養セミナー                        | 2               |
| ジャンル別科目（テーマ科目、個別科目、総合科目、開放科目） | 16              |
| 身体活動科学演習                      | 2               |
| 外国語演習                         | 8               |
| その他                           | 1               |
| 計                             | 29 <sup>4</sup> |

2. どのような内容が行われてきたのか？

## 応用生物科学部開講の教養セミナー

（1997年、平成9年）農学部教員担当セミナー一覧

### 生物資源生産学科

- 百町セミナー 生物界の混沌と秩序（講義）
- 大場セミナー 植物を育てよう（講義、実習）
- 岩澤セミナー 内分泌学研究への歩み（講義）

### 生物生産システム学科

- 笹野セミナー 世界の農業と地球環境（講義）
- 三輪セミナー 豊かなみりをめざして（対話形式）
- 柳田セミナー 古典を読もう！（輪読形式）

### 生物資源利用学科

- 鈴木セミナー インターネットと生物学（講義演習）
- 早川セミナー 食をテーマとした自活支援セミナー（講義、調査&、体験）
- 重松セミナー 料理の化学と台所の科学（家庭でできる化学実験、発表）

### 獣医学科

- 鈴木セミナー 地域と大学（学内探訪、地域社会見学、SCS交流、総合討論）
- 平井セミナー 病原微生物への招待（講義）
- 工藤セミナー 科学論文読解、学内外の探訪と体験、総合討論

中身については、各教員に委ねられていた

(1997年、平成9年)

|   |                                 |  |
|---|---------------------------------|--|
| 科目区分:<br>教養セミナー   | 授業科目<br>早川セミナー                  | 担当教員<br>早川享志<br>所属学部等:農学部  |
| 【講義のねらい】<br>大学生としてスタートを切った学生が学習を含めた自活を進める上で学ぶべきこと、問題点を、セミナー参加者の相互理解、教官との交流の中で、意見交換し、自ら考え、行動が出来るようになることをめざす。従って、本セミナーは、岐阜大学における自活支援セミナーとしての性格も併せ持つ。また、図書館などの学内施設、コンピューターからのインターネットの利用を通して必要な情報を得るための手段についても体得する機会を持たせたいと考えている。学生生活全般が本セミナーの対象であるが、とくに食に関するテーマに関しては、各種成長の停滞したおみやげを題材とすることも計画している。時には化学的、生物学的領域に及ぶ内容についても取り扱うが、科学を学ぶよりする前向きな態度さえあれば、これらの科目の学習の有無は問わない。題材によっては、英語の資料も取り扱うので、辞書が必要となる時もある。 |                                 | 【講義計画】<br>1 セミナー全体の説明、自己紹介。<br>2 参加者相互の交流、テーマの設定。<br>3 大学の教育を知らう。<br>4 “食”をテーマとして(その1)。<br>5 “食”をテーマとして(その2)。<br>6 “食”をテーマとして(その3)。<br>7 “おみやげ”の効能。<br>8 “食と科学”をテーマとして。<br>9 “食と情報”をテーマとして。<br>10 図書館で情報を探す。<br>11 与えられたテーマを調査する。<br>12 調査した結果を報告する。<br>13 コンピューターによる生活支援。<br>14 コンピューターによる情報支援。<br>15 インターネットを体験する。 |
| 講義時期:前期・全曜5限<br>対象学生:農学部優先・教育学部も可   | 成績評価:<br>セミナーへの参加の評価およびレポート(数回) | 教科書、その他:<br>教材・必要なのは、セミナーの中で指示する。  |

農学部優先、教育学部も可

2. どのような内容が行われてきたのか?

## 応用生物科学部における教養セミナー

(1997年、平成9年)

### 早川セミナーの授業内容

1. セミナー全体の説明、自己紹介
2. 参加者相互の交流、テーマの設定
3. 大学の教育を知らう
4. “食”をテーマとして(その1)
5. “食”をテーマとして(その2)
6. “食”をテーマとして(その3)
7. “おみやげ”の効能
8. “食と科学”をテーマとして
9. “食と情報”をテーマとして
10. 図書館で情報を探す
11. 与えられたテーマを調査する
12. 調査した結果を報告する
13. コンピュータによる生活支援
14. コンピュータによる情報支援
15. インターネットを体験する

7

3. どのように内容が加えられてきたのか?

## 応用生物科学部における教養セミナー

### 図書館ツアーについて

H9(1997)年度早川セミナー  
図書館見学、図書館での情報検索など実施

H18(2006)年度教養セミナー  
応用生物科学部複数教員からの直接依頼による図書館ツアーを実施

H19(2007)年度教養セミナー  
応用生物科学部江口学務係長からの依頼による図書館ツアーを全クラスについて実施

8

3. どのように内容が加えられてきたのか?

## 応用生物科学部における教養セミナー

### 講演会について

小宮山学部長の時に講演Ⅱが導入され、その後拡充された。

講演Ⅰ:学生支援と学生ラウンジ(佐渡)

講演Ⅱ:大学生に期待すること ~災害救援NPOの現場から(栗田)

講演Ⅲ:大学生のメンタルヘルス ~生と死を考える~(田中)

### その他

「キャンパスガイドの読み合わせ」が初回に加わった。

9

(2010年、平成20年)

|       |  |        |                             |
|-------|--|--------|-----------------------------|
| 授業科目名 | 早川セミナー   |        |                             |
| 授業担当者 | 早川 享志 (応用生物科学部)  |        |                             |
| 開講時期  | 1 前期学期   | 年 回 数  | 2                           |
| 授業概要  | 食べるといふ行為は、まず生きるのであるが、健康に生きることににおいても重要である。このセミナーでは食と健康に関わる認識を取り上げて、講義を行うと共に、提示した中で興味のある項目について学生自らが情報収集を行い、その項目についてミニプレゼンテーションをしてもらう予定である。本についての学習の中で、他学部内での資料館の見学も予定している。                     |        |                             |
| 到達目標  | いろいろな実情が認識できる中、食にまつわる諸問題について学習し、健全な食生活を大学生活の中で実践するために必要な考え方を身につけることを目指す。   |        |                             |
| 授業内容  | 1. 授業の進め方と全体概要の説明<br>2. 食品、健康と水<br>3. いろいろな水<br>4. 本の資料館の見学<br>5. 日本の食生活の変化と食生活の健康<br>6. 栄養不良と栄養過多<br>7. 健康意識とフードファディズム・サプリメントで健康な食生活?~<br>8. 食生活と時代的変遷<br>9. ミニプレゼンテーション<br>10. ミニプレゼンテーション |        |                             |
| 授業出席  | 可  | 自己学習の意 | 自己学習の意は授業管理から、「食」への理解を深めよう。 |
| その他   | 必要な資料は配布する。一部の図書は借用するが、購入は参加者の意思による。<br>成績評価:出席(30%)、レポート(30%)、プレゼンテーション等の参加姿勢(40%)  |        |                             |

10

3. どのように内容が加えられてきたのか?

## 応用生物科学部における教養セミナー

### 早川セミナー: -食と健康- (2010年、平成20年)

#### 授業内容 (青文字は、学部共通部分)

1. キャンパスガイド2010の読み合わせ
2. 講演Ⅰ:学生支援と学生ラウンジ(佐渡, 101)
3. 講演Ⅱ:大学生に期待すること ~災害救援NPOの現場から(栗田, 101)
4. 授業の進め方と全体概要の説明、自己紹介(& 10. の対応説明)
5. 日本の食生活の変化と疾病構造の変化
6. 栄養不良と栄養過多
7. 図書館ツアー(図書館)
8. 食品、健康と水
9. いろいろな水
10. 水の資料館の見学で代替(レポート提出)
11. 健康意識とフードファディズム・サプリメントで健康な食生活?~
12. ミニプレゼンテーション(選択項目の提示と担当者の決定)
13. 講演Ⅲ:大学生のメンタルヘルス ~生と死を考える~(田中)101
14. 食品偽装と時代的変遷
15. ミニプレゼンテーション(担当項目の発表)

11

4. 平成25年度に対してはどのような検討が加えられたのか？

## 初年次セミナーワーキングによる改善案 (2012年, 平成24年)

入学してきた学生はまじめで好學に燃えた印象がある



教員の失敗談、研究の楽しさなどを各課程代表  
教員によって熱く語ってもらうことにより、  
学生の興味を維持できるのではないかと？

学年の進行に伴ってこうした印象が薄れ行く？

12

| 授業科目名 | 早川セミナー「食と健康」<br>(Hayakawa Seminar - Food and Health -)  |                               |   |      |
|-------|---|-------------------------------|---|------|
| 授業担当者 | 早川 幸志 (応用生物科学部)   |                               |   |      |
| 開講時期  | 1年次前期   | 単 位 数                         | 2 | 授業形態 |
| 授業概要  | 食べるといふ行為は、まず生きることにあるが、実際には健康に生きるためにも重要である。食と健康に関する話題を取り上げて、講義を行うと共に、興味のある項目について学生自身による積極的参加を行い、プレゼンをしてもらう予定である。疑問の解決等ができれば、意欲に関する実証・実験のような作業も予定している。  |                               |   |      |
| 到達目標  | いろいろな食習慣が広がる中、食にまつわる諸問題について学習し、健全な食生活を大学生活の中で実践するために必要な考え方を身につけることを目指す。   |                               |   |      |
| 授業内容  | <ul style="list-style-type: none"> <li>第1講義 キャンパスガイド2013の読み合わせ (各クラスごとに実施)</li> <li>第2講義 講義Ⅰ: 学生支援とこころの悩み (保健管理センター・山本)</li> <li>第3講義 図書館ツアー</li> <li>第4講義 応用生物科学部各課程教員の研究談義 (1)</li> <li>第5講義 応用生物科学部各課程教員の研究談義 (2)</li> <li>第6講義 応用生物科学部各課程教員の研究談義 (3)</li> <li>第7講義 講義Ⅱ: 「大学生に期待すること〜巨大災害に備えて」(レスキュースタッフ・栗田)</li> <li>第8講義 授業の進め方と全体概要の説明、自己紹介</li> <li>第9講義 食品と水</li> <li>第10講義 栄養素の欠乏と過剰 (ミニプレゼンテーション 選択項目の提示と担当者の決定)</li> <li>第11講義 講義Ⅲ: 大学生のメンタルヘルス〜生と死を考える〜 (保健管理センター・西尾)</li> <li>第12講義 食品の真正と偽和 (ミニプレゼンテーション 担当項目・担当者の決定)</li> <li>第13講義 ミニプレゼンテーション (担当項目の発表)</li> <li>第14講義 ミニプレゼンテーション (担当項目の発表)</li> <li>第15講義 ミニプレゼンテーション (担当項目の発表)</li> </ul> |                               |   |      |
| 授業目標  | 食   | 学内の学生に限り、ただし、授業担当者事前に了解を得ること。 |   |      |
| テキスト  | なし  |                               |   |      |
| 試験方法  | なし  |                               |   |      |
| 成績評価  | 必要な出席を踏まえた上で、参加態度 (50%)、プレゼン (40%) で総合評価を行う。  |                               |   |      |
| 備考    | なし  |                               |   | 13   |

4. 平成25年度においてどのような検討が加えられたのか？

## 応用生物科学部における教養初年次セミナー 早川セミナー: -食と健康- (2013年, 平成25年)

授業内容

1. キャンパスガイド2013の読み合わせ (各クラスごとに実施)
2. 講演Ⅰ: 学生支援とこころの悩み (保健管理センター・山本)
3. 図書館ツアー
4. 応用生物科学部教員による研究談義 (生産環境科学課程・安藤)
5. 応用生物科学部教員による研究談義 (応用生命科学課程・光永)
6. 応用生物科学部教員による研究談義 (共同獣医学科・北川)
7. 講演Ⅱ: 「大学生に期待すること〜巨大災害に備えて」(レスキュースタッフ・栗田)
8. 授業の進め方と全体概要の説明、自己紹介
9. 食品と水
10. 栄養素の欠乏と過剰 (ミニプレゼンテーション 選択項目の提示と担当者の決定)
11. 講演Ⅲ: 大学生のメンタルヘルス〜生と死を考える〜 (保健管理センター・西尾)
12. 食品の真正と偽和 (ミニプレゼンテーション 担当項目・担当者の決定)
13. ミニプレゼンテーション (担当項目の発表)
14. ミニプレゼンテーション (担当項目の発表)
15. ミニプレゼンテーション (担当項目の発表)

14

## 自己認識と相互認識の場としての初年次セミナー H25年度早川セミナー

### 受講生プロフィール



用紙書式名:

注意:  
個人情報を含むので、取扱いに注意して下さい。  
不要になった場合は、応用生物科学部教員事務室  
宛に郵送あるいはリサイクルで処理するなどして下さい。

最初の講義で自己プロフィールを  
記入してもらい、それを1頁に6人  
の冊子体として配布する。

自己紹介時に、本人のコメントなど  
をメモしてもらい、相互理解を促進  
させる資料として活用。

プレゼン時にも、各自のプロフィール  
を参考にしつつ、聴講できる。

15

5. 今後はどのような取り組みが必要なのか？

## 更なる初年次セミナーの充実を目指して

### 今後の課題

- ・現在、担当教員は輪番など専任でないので、各年度の統一性の維持が困難である。  
→継続的な担当？
- ・日本語能力の涵養については必要性は認識しているが実施についての検討はできていない。  
→初年次セミナーの少人数体制の利用
- ・討論形式による意思伝達能力、自己表現力の涵養の場
- ・現状では、絶対的な時間不足

16

ご清聴ありがとうございました

17

## 総合討論

司会：安田 淳一郎

(教養教育推進センター 准教授)



【司会 (安田)】 それでは、ただいまより総合討論に移ってまいりたいと思います。総合討論の司会は、引き続き教養教育推進センターの安田が担当させていただきます。

総合討論に先立ちまして、まず簡単に報告していただいた方でパネルディスカッションをさせていただきますと思います。報告者の先生方には、他の報告者の方をどなたか1名の報告に対して、ご質問もしくはコメントを頂きたいと思います。

それでは、中川先生からでよろしかったでしょうか。よろしくお願いいたします。

【中川】 工学部の、最初は情報処理が中心だったのが、日本語表現やプレゼンテーションにシフトしていったということに興味を持ちました。特にテーマを設けて、そして「学生の活動と実際」という1回から7回までの内容を見せていただいたのですが、大変秩序立っていて、「4つのカスタートアップセミナー」ととてもよく似ているものと思いました。

この情報処理関係の内容と、このようなプレゼンテーションを中心とする内容を両方やると、かなり大変だろうと思うのですが、どのようにその問題を解決されているのでしょうか。

【青木】 ありがとうございます。当初は、先ほどもお話ししましたように、学科、専門教育で必要となってくることに割と近い、コンピューターの関係の科目を入れたんですけども、4年ぐらい後に、途中でカリキュラム改正がありまして、新しい科目で計算機関係の科目が増えたんです。だから、そちらのほうでだいぶやるので、ここでやらなくてもいいだろうと。初年次セミナー、フレッシューズセミナーでは、そこでしかできないことをやりましょうということで、じっくり時間をかけてやるようにしました。

【司会 (安田)】 それでは続きまして、青木先生からよろしくお願いいたします。

【青木】 中川先生のお話の中でピアサポートというのは、あらゆることが非常にうまく組まれて、その反面、そんなにうまくいくんですかという驚きを持ってお聞きしました。この SA たちのモチベーションといいますか、それはどこから来るのか、なぜそこまでやってくれるのか、ということを知りたいのですが。

【中川】 1年の後期に「キャリア実践科目」という、少人数の実践科目を開講しています。共通教育では、先生方に、既に応分の負担があるものですので、新しい授業を開講するというのは大変難しいものです。

ただ、使命感に燃えていろんな授業をやりたいという先生方はおられます。例えば、男女共同参画に関わっておられる先生は、それを何とか広めたいという意志を持っておられますし、障がいのある学生に対しての支援というのは、教育学部の特別支援講座の先生方が、全学に広げたいという意志を持っておられます。国際交流センターの先生は、もう少し留学生支援を何とか制度的にやりたいとか、環境 ISO をやっている先生方は、それを何とか全学に広めたいとかいう使命

感を持った教員はいます。そのような問題意識がある先生をピックアップしていけば、かなりのやる気のある授業が開設できます。

授業では、具体的なプロジェクトを設けて、最終的にアカデミックフェアという共通の場で報告することにします。その運営を学生たちさせます。受講生のOBがピアサポート学生委員会というのを作りました。最初は彼らにかなりの使命感を植え付けました。最初は12名だけだったのですが、そのときに、教員・職員・学生の「学生支援サミット」を2日間かけてやりました。教職員と学生が1対1になってビジョンを語り合っ、そしてそれを他己紹介のような形でグループワークにしていって、それでピアサポーター宣言の作成にまでもっていきました。メディアの前で、学生支援方針を学長が読んで、次にピアサポーター宣言を学生が読み上げるという形でスタートすると、火が付きました。

彼らが、そしてそういう形で横のつながりをつくり、そして授業と授業後のケアができてくると、結構強力な団体として機能するようになりました。そうすると、それであとはキャリア支援の教員を特任で最初雇用するときに、ピアサポーター養成というものでミッションを与えまして、それでピアサポートルームというのをきっちり設けて、彼らがいつもたまって、そしてそれを養成するのは複数の先生でやれるような形をつくりましたので、それで少し熱くなったという形になりました。

【青木】 ありがとうございます。

【司会（安田）】 ありがとうございます。それでは、続きまして、三宅先生、よろしくお願ひします。

【三宅】 質問ではなく、感想なのですが、早川先生のお話をお聞きして、まさにセミナーをスタートする前に議論した際に、検討課題としてあげられたものでしたので、とても参考になりました。学生と教員の段差をどのように埋めていくかという点も課題となっていましたので、教員からの研究談義というものを盛り込んだらどうかといった意見も実際にありました。限られた時間の中ではありますが、今後、取り込んでいけたらと思います。

【早川】 われわれの場合は共通部分がありますから、無理やり共通部分を設定して、残りを担当の先生にやってもらうという形で進められるので、ある程度自由にできたというのがありますね。最初から課程でこういうふうにやろうという形であるわけではありませんから。われわれがリードしてこういうふうにやっていくという骨子をつくれれば、残りはあと先生がやっていただける、そういう安心感もありますし。

それから、各先生方が共通して、やはり同じような意見を持ってみえたということがありますので、共通認識として進められたというのも1つの、結果としてうまくいったということが、そういうことにあるのかなと思っています。

【司会（安田）】 ありがとうございます。それでは、早川先生、よろしくお願ひします。

【早川】 中川先生にちょっとお伺いしたいんですけども、この「4つの力」を測定する修学達成度評価システム、こういったものをどういうふうに構築されて、実際にどういう評価をしたらいいのかということをお尋ねしたいんですけども。

【中川】 第1期の中期目標期間に、高等教育創造開発センターで教育評価部門に属しておられる心理学の先生方が、心理テストを作りました。ただ、これには問題がありました。モチベーションに関しても、入学時が一番高く、すぐに減少していくのです。経年的に修学達成度を見てい

くと、上がらずに下がっていきます。そして、「4つのカスタートアップセミナー」の導入の成果を見ると、就学達成度評価から見ると「下がり方が減った」というふうには出てこない。この測度は修正が必要だと考えています。

ただ、「4つのカスタートアップセミナー」を通して、各自のどのような力が付いたかというようなことに関しましては、結構明確なパターンが出てくるようになりました。つまり、毎回「4つの力」はどんなものかということをお皆が振り返って自己評価するようなことを15回続けますので、その後の授業評価で、どの力が身についたかということに関しては、比較的統一したパターンが出てくるようになったもので、ある程度効果があるかなと思っています。

一方で、「4つの力」可視化システムというものを作りました。授業アンケートで自分がその授業を通して獲得した資質を記載しますが、それぞれの授業が終わった後にどの力が積み上がっていくかが可視化的に見えるようにしたシステムです。今は、修学達成度評価に、この可視化システムを併用することを勧めています。また、修学達成度評価委自体も、ルーブリックを使った別の「4つの力」に統一した形のものに変えようか、それとも可視化システムを生かそうか、それとも、継続性もありますので、今の修学達成度評価をずっと続けていこうか、今それを議論しているところでございます。

【司会（安田）】 ありがとうございます。それでは、ただいまよりフロアからいろいろご質問をいただきたいと思っております。個別の発表に関する事実確認のご質問から大きな質問まで、どのような質問でも歓迎させていただきますので、ご質問のある方は挙手にてよろしくお願ひします。いかがでしょうか。

はい、どうぞ。廣瀬先生。ご発言の前に、ご所属とお名前をよろしくお願ひいたします。

【廣瀬】 キャリア教育センターの特任教員の廣瀬です。中川先生にお聞きしたいのですが、岐阜大学でも、PBL型も含めたこういったシップの中の評価ですね、いわゆるルーブリックの形を使って評価しようということで、今ちょっと準備を進めております。そういう中で、実際に三重大学では、ウェブ上での入力によってデータ管理をされているのかどうかということと、あと、そのデータについてのいわゆる統計学的な検定も含めた検討をなさっておられるのかどうか。データ分析等ではかなり有効な感じがしておりますので、そういった個々のコンピテンシーに対するシグニフィカントを見ておられるのかどうかについてお伺ひしたいと思います。

【中川】 各授業の後にどのような力が付いたかということに関しましては、ウェブ上でも入力できますし、あとはアンケート用紙に書いたものを回収して業者に預けてという、この両方ができるようになっています。今まではずっと用紙で実施していたのですが、今年度からウェブ上に入れられるようになっています。現状では、ほとんどは用紙のままです。

それで、大きなレベルでの検証は、共通教育などでは非常にやりやすいのですが、教務委員会で学部のことをやる時には、それぞれ担当者の学部の承認とか、学部がデータをお願ひするという形で入れないといけないという形になってしまったもので、なかなか統一的な評価ができない形になっています。今は使い勝手が悪いので、少しずつ変えていかななくてはいけないと思っています。

【廣瀬】 それに関して、例えばベネッセだとかリアセックだとかそういった、私も前職のほうでそういう流れで連携しながら、いわゆるシステム化していつているのですけれど、三重大学は三重大学単独でやっておられるのか、それか産学連携と一緒にソフト開発されているのか、その

辺はどうでしょうか。

【中川】 PROG というのは今全国でかなり使われ始めてきていますが、あれはかなり、費用が掛かるので、毎年実施することは困難です。

あと今、産業界ニーズ事業の九州ブロックで、1つのチームが、メタルブリックの開発に取り組んでいます。それらの成果をも参考にしながら、三重大大学の教育目標との整合性を持った形で、かつ安価にこれから継続的にやれるかなという形で改訂版ができないかを今検討しているところです。

【廣瀬】 ありがとうございます。

【司会 (安田)】 ありがとうございます。それでは、その他ご質問ある方、挙手にてお願いいたします。よろしくお願いします。

【新田】 工学部の新田という者で、青木先生と三宅先生といっしょに初年次セミナーを担当させていただいている者ですけれども、このスタートアップセミナーの概要を見ると、なんかすごくいろんなことをやられているなという印象を持ちまして。先ほどの授業を担当させていただいた経験から考えると、このプレゼンの指導だけでも結構時間がかかるなという感じを受けたのですが、この授業ではどれぐらいの到達点を設定されているんですか。

【中川】 毎回の授業の中では、今回の授業の目的はどうであって、到達点はここであるということは、学生にまず提示します。そして、最後のふり返しシートで、それで学生がどこまで到達したかを書かせることを繰り返しています。

プレゼンの成功の一番大きなポイントは時間管理です。つまり、ファシリテーターとしてどこからどこまで、どの時間をどうやるという時間区分をきっちりと、うまくその時間に収まるような形で。学生の発表も10あります。それを1回の授業で全部発表しなければならない。そうすると、それをそれぞれ評価するとなると、事前にその評価をするフォーマットはそこに提示しておいて、学生に読んでおくように言っておいて、そしてフォーマットを入れて、そして Moodle に入れてという作業が全部必要になってきます。その部分をどうやるかということは、教員間でいつも集まって、時間内にどうやってきっちりできるかということを調整しております。

【新田】 例えば、このレポート作成では、1回の授業でレポートが書けるようになるわけではないですね。

【中川】 はい。レポート作成は、今、基本的には『レポート作成ハンドブック』という別の本が、入学時に全ての学生に配布してあります。ですから、その授業では、基本的にはこういうようなものを使ってくださいという紹介が1つです。

あと、プレゼンテーションをやるときに「一番大事なのは序論・本論・結論です」と、この部分だけを皆さんに納得していただいて、実際レポートは書きません。ここでは、プレゼンるときにそのような構成をある程度意識した上でプレゼンを作ってくださいという、そういう指導にとどめております。

【司会 (安田)】 ありがとうございます。それでは、どうぞよろしくお願いします。

【柴田】 中川先生にお聞きします。地域科学部の柴田と申します。事実関係ですけれども、初年次セミナーの全学必修化に向けた取り組みということで、人文学部だけが必修化されていないので、こういった議論があるのかを少し紹介していただければと思います。よろしくお願いします。

【中川】 文系学部というところは、学部が自分で決めるということを非常に重視するところがありまして、自分たちとは違ったところで統一的なプログラムがあること自体に対しての抵抗があります。

加えて、人文学部にもオリエンテーションセミナーという独自のものがございまして、それはそれで良くできているのです。主に専門の、あるところは本を読んだり、あるところはフィールドに行ったり、あるところは別のことを、それぞれの先生に持ち味に応じたものがあります。それは大事なのですが、同時に統一的なスタディスキルを教えることも必要ということをお願いしました。しかし、やはり「統一的」ということ自体につまずくという部分が多いようです。最終的には、今までのオリエンテーションセミナーを、人文学部の「文化学科スタートアップセミナー」とか「法律経済学科スタートアップセミナー」と名前を変えるところで落ち着きました。これらの科目に、全学の教育目標を知らせるために、高等教育創造開発センター教員か教育担当理事が1回分は話をするというところで妥協したということになっています。

でも、そういうのはあったにしても、人文学部の学生はやっぱり選択で取れますので、現在では半分以上が履修しているという現状はあります。

【柴田】 ありがとうございます。

【司会 (安田)】 ありがとうございます。それでは、その他質問のある方、いかがでしょうか。

早川先生、よろしくお願いします。

【早川】 工学部のプレゼン大会、これに関してお聞きしたいんですけども。われわれは卒論発表会でもかなり大変だと思うんですけども、こういった授業の中のプレゼン大会に学科教員による審査というところまで加わると、かなり大変じゃないかと思うんですけども、実際には何分ぐらいのプレゼンをやってもらおうかということ。それから、審査の教員というのは学科の教員全てなのか、担当教員のみなのか、そのあたりをちょっと教えていただけますか。

【青木】 プレゼンに関しては、今年は質疑応答を合わせて10分でやりました。6つの班が発表して、聞くのは、同じ受講している学生と、それから教員です。一応、コースの教員全員に声を掛けて、来られない方もいらっやいますけれども、かなり多くの方が参加して、質問をしたりコメントをしたり。まさにそこが一番大事なところで、いつも教室で指導しているわれわれが言うだけではなくて、他の先生も同じことを、実は、何も打ち合わせをしていないのに質問してくるという、そういう経験は結構あります。

審査にはそれぞれ、教員だけではなくて大学院の学生だとか、上級生にも声を掛けて、少なからず入ってくれまして。審査項目に点数を付けて出していただいて、その平均値といいますかトータルをとって審査するということをしています。

【司会 (安田)】 ありがとうございます。フロアのほうからご質問ある方、よろしくお願いします。時間のほうが押しているんですが、議論が白熱しているということで、しばらく続けさせていただきますと思います。

【野村】 教養教育推進センターの野村です。

皆さんに2つお聞きしたいことがあります。今、三重大の中川先生から、全学でスタートアップセミナーを実施しているというお話がありましたが、岐阜大学の場合、応用生物科学部は「統一メニュー」を部分的に取り入れ、工学部は学科ごとでばらつきがあり、教育学部もかなりバラバラです。地域科学部や医学部も独自の取り組みをされています。



岐阜大学の教養教育推進センターでは、去年から初年次セミナーを全学共通教育に位置付けることにしました。それまでは各学部が担当していたのですが、全学共通教育の単位に戻したのです。以前、教養部があったときのように、全学で取り組もうという方向で進めています。

それで、今、教養教育推進センターでは、その「共通メニュー」を作ろうとしています。応用生物科学部の先生方のこれまでの試みなどを参考に、15回の授業の中で10項目ぐらい「メニュー」をフィックスして、日本語の書き方、本の読み方、プレゼンの仕方とか、先生方が取り組まれていることで特に重要な内容を最大公約数的に取り上げ、それをもとにカリキュラムを作ろうとしています。

そこで皆さんにお訊きしたいのは、全学の学生に統一的に初年次教育を施すという考え方に関してどうお考えになるかということと、もう1つは、教養部があったころは、岐阜大学に入学した学生は、さまざまな学部の学生が交流できるセミナーがあり、それが初年次教育の非常に重要な点だったと思いますが、そうした学部の壁を超えた混成によるセミナーをやるという案についてどうお考えになるでしょうか。

もちろん、学部の壁を超えるのは、現実的にはなかなか難しいのですが、さまざまな分野の学生が集まる授業が本当に減ってきてしまって、みんな学部の壁の中に閉じこもり、交流の機会がどんどん乏しくなっているというのが現状です。せっかく各学部が同じキャンパスに集まったのに、そのメリットがあまり活かされていないというのは皮肉なことです。こうした状況を打破できるのは、全学共通教育しかないと思います。

そういう点について、皆さんからご意見をお伺いしたいと思います。よろしくお願いします。

【司会（安田）】 答えていただくのは、中川先生、青木先生、早川先生、三宅先生の4名で一言ずつ、よろしくお願いします。

【中川】 三重大のスタートアップセミナーは学部学科ごとで編成しています。それは、先ほど言いましたように、カリキュラム編成上の現実的な問題点からそのようになったものです。ただ、PBLセミナーというかなり上級向けのPBLは、3人に1人は受講しますし、キャリア教育は、全部で1,400人ぐらいが入学しますけれど、2,000人が取りますので、それは全部学科混成になっています。4SUS以外のPBL型セミナーは学部を超えた編成ですから、4SUSに関しては学部学科ごとでいいという判断をしております。

【青木】 私は、工学部の意見を代表するものではないので、個人的な意見ですけれども、そういうやり方ができるならいいかもしれませんが、むしろそういうことよりも、例えば基盤的能力を伸ばしたいという目的があったときに、それを担当する先生が意味を分かって、その上でやるのであれば、個性を生かした違うことをやっても、何ら差し支えないのではないかと思います。要するに、形は違っても伝えたいことは同じであるということがもし保障されるならば、いいのではないかと思います。

実際に、同じメニューでというのは、三重大さんのように、5名とか限られた専門の先生がその授業を担当するのであれば可能かもしれませんが、複数の教員が、いろいろな学科の先生がやるときに、統一メニューでやるというのはほとんど不可能ではないかと思います。

【三宅】 私は、もし自分が学生だったらと思うと、いろんな学部の人との交流があるというのはよいと思います。今、課外活動などもだいぶ減ってきているように見えますので、そういった点でもやはり、交流があるというのはよいと思います。ただ、その場合には、レベル設定が難

しいかなと思います。

それと、そこでの学びが、次の学年に進んだときにどういうふうにつながるのかというところが、どのくらいみんなでも共有できるかというのが鍵になるのではないかと考えています。

【早川】 まず、構築してきたものが壊れてしまうというのは寂しいなということは、1つ思いますね。それから、共通で各学部入り乱れてするという形になると、昔の全教時代、教養時代の形になるということを考えてみえるのでしょうか。その辺がちょっと分からないので、逆にちょっと質問させていただきたいんですけども。

【野村】 以前に戻るといっても、各学部間、学科間に閉じ込められている状況というのは、総合大学の姿として非常に残念なことだと思うのです。これは、初年次セミナーに限らず、例えば英語もそうになっていますよね。さまざまな事情からそうになっているとは思いますが、あまりにも全てが学部学科単位になっており、効率だけを重視して、必ずしも教育効果を考えてやっているわけではないというのが問題なので、過去に帰るということではありません。

【早川】 先ほど三宅先生が言われたように、担当を例えば平等にやろうと思うと、それなりの能力を持った先生方の集団が同じような教育を施さないとかなり難しいかなということを、個人的には感じます。ですから、1人で全部通しでやるというよりは、やはりそのなかのメニューの、例えば日本語の教育だったら誰々先生とか、それから他のプレゼンだったら誰々先生とか、そういったある集団というんですか、そういった人たちが合同で対応できるような形ができれば、そういった形もいいのではないかなと思います。

われわれとしては、もともとは、「応生はこういう形でやってください」という形で教員に来ますので、かなりフレキシブルに対応できるんじゃないかと、個人的には思っています。決して、学部でこういうふうに来てきたからこういうふう構築するという事は、たぶんないんじゃないかと個人的には思っていますけれども。

【司会 (安田)】 ありがとうございます。それでは、さすがにもう時間がだいぶ過ぎておりますので、そろそろまとめのほうに入っていきたいと思うんですが、私からまとめをさせていただくというよりは、最後にもう一度、講演者の方々から一言ずつ、今回のFD研究会を踏まえてお考えになったことを手短にお話し頂ければと思います。よろしくお願いいたします。

【中川】 本日はありがとうございます。本当に、どこの大学でも、同じところで苦しんでおられるという状況が分かったので、非常に励みになって、今日は来て大変良かったと思います。ありがとうございます。

【青木】 私も、こういう機会が……、こういう形かどうかは別として、いろいろな試みが学内で行われていることを、なかなか知る機会がないので、今回、限られた例でしたが、三重大学さんの先進的なものも拝見して、非常に参考になりました。何かそういう知識というか、われわれが経験して教えて、いろいろ失敗したりなんかした、そういう経験知みたいなものを集約して体系化したりする、そういう場を教養教育推進センターにやっていただければ、頼んじやいけないのかな……いいなと思いました。

【三宅】 私は、発表させていただいて、自分自身、ちょっと体当たりで頑張り過ぎたというか、力が入り過ぎているなというのを、今、感じています。学生さんの気持ちを中心に置いて、そこから何を彼らは本当に必要としているかというところへもう一回立ち戻って、もう少し改善できたらいいなと思います。

【早川】 なかなか他の学部とか大学の取り組みを見る機会がないままで、私たちの学部で取り組んできているわけです。ですから、今回いろんな情報を得たので、今後いろいろやっていく中でも、例えば学部としてそういったことも含めて、どういうスタイルがいいのかなというようなこれからの岐阜大学の1つの提言を、今回のこの会が与えてくれたのかなと思っています。

【司会 (安田)】 ありがとうございました。それでは、これにて第1回FD研究会を閉会とさせていただきます。さまざまな不手際がありましたことを、運営を代表しておわびいたします。今日は皆さん、お忙しい中お集まりいただき、本当にありがとうございました。



## 参加者データ

| 職種別内訳(人) |    |
|----------|----|
| 学生       | 0  |
| 教育系職員    | 54 |
| 事務系職員    | 9  |
| 役員       | 1  |
| 合 計      | 64 |

| 所属別内訳(人) |    |
|----------|----|
| 役員       | 1  |
| 大学本部     | 11 |
| 教育学部     | 3  |
| 地域科学部    | 5  |
| 医学部      | 17 |
| 工学部      | 14 |
| 応用生物科学部  | 10 |
| センター     | 2  |
| その他      | 1  |
| 合 計      | 64 |

**平成25年度第1回FD研究会**  
**「大学初年次の共通教育と学修支援」**  
**アンケート**

本日はお忙しい折、本研究会にご参加いただき、誠にありがとうございました。今後の教養教育推進センター主催のイベント企画・運営に役立たせていただきますので、アンケートへのご協力をお願いいたします。

1. 本研究会の満足度はいかがでしたか。5（満足）から1（不満足）までの5段階でお答えください。

満足            どちらでもない          不満足  
5 . . . . 4 . . . . 3 . . . . 2 . . . . 1

2. 本研究会で得られた、今後役立ちそうな知見がございましたら、お書き下さい。

3. 本研究会で扱った話題に関して、疑問に残ったことがございましたら、お書き下さい。

4. 本研究会について、ご意見・ご要望がございましたら、ご自由にお書き下さい。

ご協力ありがとうございました。

ご記入が終わりましたら、退室の際にアンケートかごにお入れください。

## アンケート集計結果

◎回答者数

45名

### 1. 本研究会の満足度はいかがでしたか。

| 5 (満足) | 4   | 3   | 2  | 1 (不満足) |
|--------|-----|-----|----|---------|
| 5      | 29  | 11  | 0  | 0       |
| 11%    | 64% | 25% | 0% | 0%      |

### 2. 本研究会で得られた、今後役立ちそうな知見がございましたら、お書き下さい。

- ・三重大の初年次教育はとても参考になった。今後、岐大でもなるべく多くの教育の理解と費用が必要と思われる。
- ・初年次セミナーで行うことは、これから専門としてやっていくことの基礎なのか、能力なのかということについて考える場が得られる。
- ・「入学してきた学生はまじめで好学に燃えた印象がある」その通りだと思います。教える側の問題の方が大きいと思います。昔の学生よりもよっぽどまじめで将来のことを考えている子は多いです。
- ・それぞれの学部における初年次セミナーの取り組みについて、実践報告が参考になりました。また三重大大学の取り組みについてご報告いただき参考になりました。
- ・他学部と全く初年次セミナーの方法が違って参考になった。
- ・大学にとってどのような位置付けがあり何を学ばせたらいいのか、ぼんやりしていたので先生方の取り組みを伺い少し方向性が見いだせた。
- ・他の学部でどのように行っているのか知ることができた。学生のFD評価でセミナーについての評価をとることも一つと思った。
- ・他学科、他学部の初年次セミナーの情報が得られ、今後の参考になりました。
- ・学科の中での共通したプログラムの実践、その分野に興味を持ってもらうための研究談義
- ・現在の大学生の基礎学力。日本語教育の必要性
- ・先生方が学生に望む素養が分かった。初年次教育の定義が難しいと理解した。
- ・『もし「初年次セミナー」を完璧に実施できたらどうなるのかが依然不明』ということがわかり役立った。つまり依然初年次教育の意義が不明！！
- ・初年次セミナーを行うにあたり、学生のレディネス、どんなことが役に立つのかということを知ることができた。
- ・学生の学内業務への参加の意義 (SA 等の重要性)
- ・初年次セミナーでプレゼンの方法の教育を行うけれど、FS プレゼンテーションの方法

は学生自身が楽しんで行えるし、テーマも興味深くておもしろいと思った。

- ・入学生に対する思考傾向などの問題点は同じだと思った。工学部で行っている評価方法など大変参考になった。大学の教員目標を柱に枠組を考えることが必要だと思った。

- ・他学部で実際行っている初年次セミナーの内容（課題も）

- ・三重大の例は岐阜大学の初年次セミナー改善に役立つヒントが含まれていた。

- ・初年次セミナーに関して、他大学や他学部の色々な取り組みを教えて頂いて参考になった。

- ・キャリア・ピアサポーター資格教育プログラムの実践と運営体制ピアサポーター学生委員会阻止の維持

- ・4つの力。キャリア・ピアサポーター資格

- ・「学生に何を教えたかではなく、学生が何を学んだかが大事」という学長のお言葉

- ・教養セミナーというものが何となく何を目指しているのかがわかった。

- ・三重大の事例が参考になった。考え方から実践に向けた方向性が見いだせたように思う。特に学生による授業評価について、学生の成長に関する評価をすることは今後取り入れることができると思う。

- ・三重大の初年次教育とピアサポーター養成の試行については大変興味深く考えさせられました。工学部の発表、プレゼンテーション授業も興味深く聴いた。

### 3. 本研究会で扱った話題に関して、疑問に残ったことがございましたら、お書きください。

- ・岐大の業務の中で職業訓練を行う場合、1300人分の仕事を設定できるのか不安に思った。

- ・「初年次セミナーWG」が立ち上がると聞いていたが、それはなくなったのか？

- ・初年次セミナーの位置付け、どこにつながり、つながればいいのか？三重大の取り組みが画期的でした。

- ・現状の学生は「無気力」＋「基礎学力の低下」が問題だと思います。今日の初年次セミナーの話はどちらかというと「無気力」の問題に対するものが中心でしたので「基礎学力の低下」にも重点を置いた内容のものがあるべきだと思います。

- ・グループワークの効果があると思うので取り入れていきたい。

- ・教員ひとりが取り組める内容、量に限りがある以上、初年次学生全員にどのくらい均質な教育を提供できるのか。初年次教育として教える内容について、「岐阜大生として望む能力」の意志統一はできるのか？初年次教育においてグループワーキングは有効だが、グループワーキングでは「リーダー」が重要な位置を占める。教員はどこまで「指導」してもよいのか。

- ・学生が身につけた力を数値化できるのか。

- ・「教員の努力（労力）」と「学生への効果」のバランスが不明。初年次セミナーの『実施共通マニュアル』の作成を目指すべきだろう。教員毎の価値観がバラついている限り、混沌状態は続くだろう。

- ・やってみせ、やらせてみせて褒めてやらねば…。何をやるかを選ばせる方法が問題。
- ・プレゼンだけになっている訳ではないが、プレゼンを通して何の能力を期待しているのか？
- ・三重大大学のスタートアップセミナー31クラスの担当者はどのように決められているのか？
- ・初年次の共通教育をシステムティックに考えていくと、現在の高校教育の問題点と同じ方向に進まないだろうか。
- ・ピアサポーター学生委員会への大学としての支援はどういうものか。
- ・初年次セミナーの位置付け
- ・なぜ初年次セミナーが必要なのが分からなくなった。特に講義内容が教員にまかされているということは、学ばなければいけないことがないからなのではないかと思えた。
- ・「文章作法」というプログラムに興味を持ちました。どんな内容なのですか。それはどのようにしたらみることが出来ますか。
- ・試行錯誤を繰り返し構築されてきている印象があり、このようなことを個人の教員に丸投げしていた岐阜大学のやり方はかなり間違っていたということが理解できた。三宅先生の今後どのように専門教育へつなげていくのかという問題提起はきわめて重い問題であると感じた。
- ・岐阜大学における大学としての初年次教育について学部間で共通認識があるのかどうか疑問に思った。学部毎の取り組み方に大きな違いがあるので今後は学部を超えた取り組みが必要になっているのではないかと思う。
- ・ルーブリックによる評価の管理コスト増加として、具体的事例について知りたいと思った。
- ・PBL、プロブレム、プロジェクトのテーマの選び方が難しいかなと感じまして、社会科学会だともう少し系統的に本を理解したり討論させたいところです。
- ・初年次セミナーの意味をもう一度考え直した方がよい様に思える。

#### 4. 本研究会について、ご意見・ご要望がございましたら、ご自由にお書きください。

- ・岐阜大学の初年次教育を具体的にどのようにするのか、全学的な議論が必要であることが分かった。センター主導か学部主導かどちらで行うのか、どのような方法がより better なのか、現段階ではよく分かりません。教育機構の中で議論を行い、ちゃんとした指針を出して頂きたいと思います。近年のFDの中で、内容が具体的でとても良かったと思います。
- ・それぞれのセミナーにおける評価概念は何か（SABCDをどうやってつけるのか）  
図書館の使い方、ホケカンの話は現在初年次セミナーの中に入れていますが、初年次セミナーとして扱うのが妥当なのか？つまり初年次セミナーの主旨に対してこれらの内容はふさわしいのか。内容がもりだくさんで時間配分がむずかしかったように思う。
- ・もうそろそろ中学ー高校受験勉強のせいにするのはやめた方がよい。学生の基礎学力



不足というが、そんなことはないと思うし、岐大に入れるくらいの学生が基礎力不足としたら、それ以下の他の400-500大学はどうなるのか？工学部の初年次セミナーに関しては、落としどころを決めてないと落ちるのは難しいのではないのでしょうか？特に最後の議題のところは、この3つをはじめからこちら側が決めてからやらないといけないのであって、「どこへつなげていくのか？」といわれてもそれは教える側が落としどころを決めてやるものであって、それを決めずにやればうまくいくはずがないと思う。あと、アンケートに頼りすぎ。一生懸命なのはわかりますが・・・。

・「学生の実情に即す」ことを大事にするためには、できるだけ個別、小規模なレベルでの課題設定が必要ではないか？なぜ「全学で」統一？「学びの基礎」だけでなく、学生生活のサポート、相談の場にもなりうるので、それを非常勤の方に負わせるのは問題ではないか。能力のベースは統合的なものであり、内部要素の抽出はあくまで「分析」のためのもの。それを取り出し個別に高めていくことは、結果として能力そのものを解体させかねない危うさがある。(要素還元主義) 「学部を超えた交流」について、学部内での小ユニット(学科・コース等)がある場合とそうでない場合とでは、位置付けが異なる。むしろその部分は、一般の授業で展開すべきことでは？

・共通科目を専門科目につなげていくために、どんな共通科目で何を目標にして学んでいるのか具体的に知りたいと思います。本日の初年次セミナーの実践報告ももっといろいろ知りたいと思いますので続編も計画して欲しいです。

・講師の先生方の話をもう少し伺いたかったです。先生方は時間を気にされ、早口で話されていました。聞き取りにくかったです。

・どこも同じようなことをやっていると思った。どう専門教育につなげていくかが課題。

・共通テーマをもう少ししぼり込んで報告、討議しないと課題が定まらず拡散してしまう。課題についての基調的な報告が最初にあった方が理解しやすいです。

・各学部での補修教育への取り組みに関するFDを行ってほしい。

・「学生のため」という視点があるが、学生からの声がない。報告者に学生がいた方がよかった。

・初年次セミナーで一体どういったことを目標にするのか模索していましたが今日の講演を聞いて学生にとってどんなことが必要なのか少し理解できたのではないかと思います。今後も岐大全体としての取り組みとして取り上げて行って頂けたらと思います。

・初年次セミナーの実施に対して各部局の苦勞と努力が見受けられ参考になった。

・三重は良くやっている。

・他の学部では初年次セミナー、どの様に対応されているのでしょうか。何かで公開されても、と思いました。

・教養教育全体の改革に対する一般教員からのアイデアを吸い上げるしくみが必要ではないでしょうか。

・特徴のあるプログラムを成功させている他大学の先生を呼んで紹介頂けるのは勉強になります。

・若手研究者(<40才以下の助教等)のためのFD研究会(世界に通用する自分の研究

とは?)

・生活指導が必要な学生が目立ちます。生活指導は中学や高校で済ませるべきで、20才をすぎた学生さんに対して失礼という気もしています。大学での生活指導をどう考えてどのように対応すればいいか、教えていただけると幸いです。

・今回初年次セミナーのとりくみを伺い、せっかくよい力を育ててもらっているのに、それを伸ばしきれなかったこと、また教員を養成する科目であったのに表現力を付けてもらう工夫が足らなかったことを実感しました。

・全体討論の時間が少なかった。学生からの発表や意見もほしかった。

・今一つ焦点が定まらないFDだった。

・共通教育の展開のむずかしさ（有効性）について考える機会をもっと作っていただきたい。

・1987年に教養セミナーを教養部で初めたところに岐阜大にきました。人文社会だと200人単位の授業が多く、少人数でまず大学でどう学んでいけばいいかを知ることが目的だったかと思います。ソフトボール（セミナー間）や軽食をまじえて学部をこえた学生、教員同士の交流の機会となっていたかと思います。

## 表紙 ソクラテス

紀元前5世紀、ギリシャに生まれたソクラテスは「人が人として生きる意味」を史上初めて自覚的・意識的・方法的に問うた「哲学の祖」として知られる人です。実を言うと、本格的な「学問」というのはこのソクラテスの問いから生じていったのであり、それは「人が生きていることの意味」を問うことからさらに「人がここに生きている世界」への問いとなっていったからです。私たち人間は「この世界に生きている」からです。私たちが、何が対象であれ「疑問を持ち、追求し、学ぶ」というのも本来はそうした意味がありました。「学ぶ」ということはただ単に私たちの衣食住の欲望を満たすための手段を探すためだけではありませんでした。ところが近代以降の科学はそうした「欲望の充足のための手段」とされていく傾向が強まりました。これはこれで人間の生物的な欲求を満たすものとして意味はありますけれど、人間はそれだけで生きているわけではないはずです。私たちが生きているのにどんな意味があるのかを問うことは、「人が人らしく生きる」ために必然的なことだと言えます。「本当の学問」を取り戻したいです。



岐阜大学教育推進・学生支援機構 教養教育推進部門広報誌「ディアロゴス」第21号

発行・編集

2014年2月

岐阜大学教育推進・学生支援機構教養教育推進部門

〒501-1193 岐阜市柳戸1番1

TEL. 058-293-2178 FAX 058-293-3020